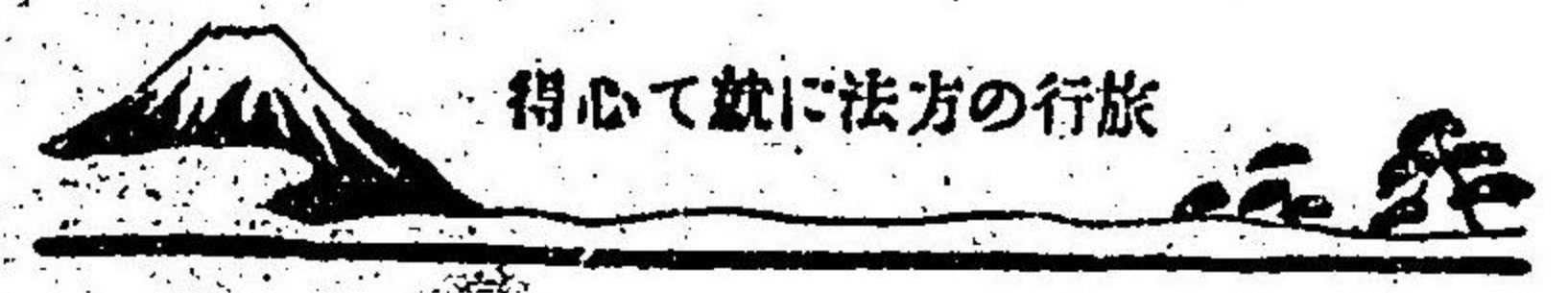
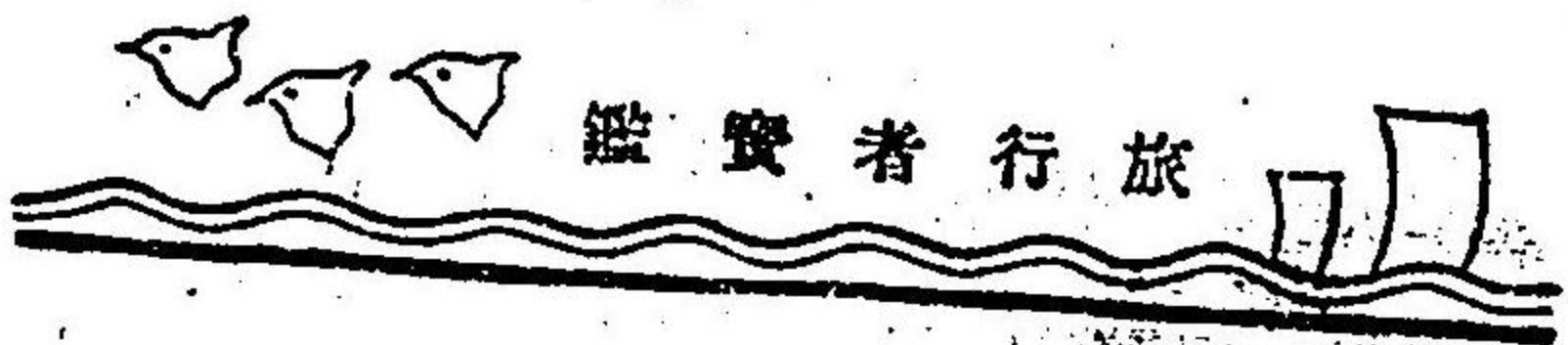


かりなるを例とす、されど、時としては、山芋を掘り、木の子を探り、栗を拾ふの路を捷徑と見違へ、飛んでも無き所に迷ひ込むこともあれば、先の見えたる所にあらずば、決して之に依るべからず、又先の見えぬのにも、たまく土地の人通りかゝりて、之に就き確むることを得たる場合は格別也。なほ、山間の旅行に於ては、枝道の別る、所に榜立ちて、何地への近道と肥したるを見ることあり、これは結構と早速枝道に入れば、晝猶暗く大木の茂りたる間の、削りたるが如き崖の面を、九十九折して降りたる果に、奔流雪を飛ばす谷川あり、岸より岸に太き針金を引き渡して、それに縋りたる渡し船を見る、掲示の通り渡し錢を拂ひ、彼方の岸に着けば、更に、先に降りしと齊しき九十九折の路を、汗になつて登らざるべからず、登り果て、行く



こと若干にして大道に合す、此所にも亦榜立てるに、何地(前に我が通過したる地)への近道とあり、而も其大道は、我が先に歩みしその一端にして、我が渡し舟に依りし谷川をば、高き橋に依つて越え來りたる也、之を知ると同時に、我は三町や五町の差を食らんが爲に、出さずとも濟む金を取られし上、無駄に骨を折り且つ時を費やしたるを悟る、要するに、渡し錢を取らんが爲に、榜を立て、人を引き寄する也。故に「近道」の榜を見たる時には、土地の者に就て、本道と捷徑との差異と關係とを問ひ、以上の如き内實なるや否やを確めたる上、其一を選ぶを可とす、若し又、近道の榜が人家を遠く離れたる所に立ち、折悪しく土地の者も通らぬ時には、思ひ切つて近道の榜を見棄てるが無難也、但し、始めより



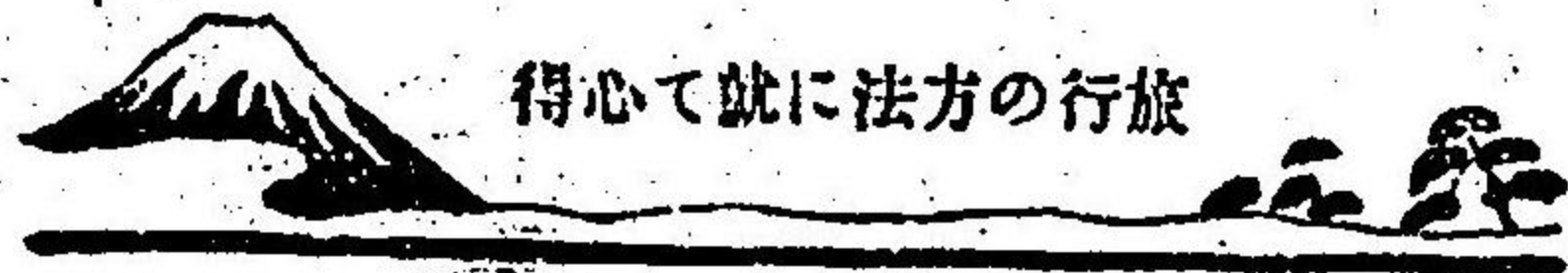
損得を度外視して、本道の趣味少きよりは捷徑の變化多きを取ると云ふ性質の旅行ならば、是も亦面白し。

其二十 早道の法

路を早く歩くことに就ては、種々の教へあり、又、早道の人に就ての逸話少からず、されど、汽車汽船の便利多き今日に至りては、長途を足に任せて歩く場合稀に、之に準じて、早道の人に就ての逸話も新に聞かえず、早道ては題目は、歴史のものに屬せんとす。

されど、早道の方法を講ずることは、萬一の場合に供すべく、如何なるハイカラの時代に於ても必要也、扱て其方法は

(一) 旅装の事 身輕に且つ窮屈ならぬやうに出て立ち、草鞋は輕く柔

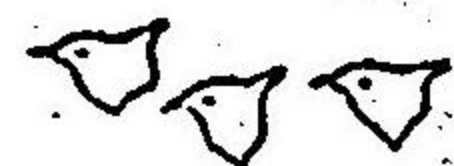


かにして久さに耐ふる力ある物を選び、携帶品は成るべく輕く少くすべし。

(二) 歩きやうの事 身を横に向けて蟹のやうに歩くべし、これは、正面に向きて正當に歩みを進むるに比し、少からず具合悪きものなれど、慣るれば自由に天下を横行すべしである、かうしての三足は、正當に歩いての四足に匹敵すること確である。

(三) 飲食の事 梅干を入れたる樽飲を携へて歩き乍ら食ふべし、飲料は吸筒に入れて携ふべし。

(四) 大小便の事 小便は人通り途切れたる所にて歩き乍ら致すべし、大便は是非無けれど、歩き乍ら其用意に股引の緒を解き寛げなどす



るを好しとす。

以上の外の事は、他の各門各項より最良の方法を選びて、之を應用すべし。

其廿一 草臥を抜く法

草臥を抜く法種々あり、されど、草臥を抜く法と足痛を療治する法とは、極めて接近せるものなれば、其半ばは「旅中の病氣に就ての心得」の門に屬せしめ、こゝにては唯だ簡易なる行爲を加へるだけにて出来る事のみを述べし。

(一) 草臥れたる時は、茶屋などにて休む節、腰を掛けて草鞋の儘に足を下ぐべからず、益々草臥加はりて、脚は木のやうに固くなるべし、其際は、縦令暫時にても、草鞋を脱いで上にあがり、乾度膝を折る



を好しとす。

(二) 宿へ着き、風呂に入りて後、鹽を求めてシタ、カ足の裏へ擦り付け、火にて烘るべし。

(三) 風呂を熱くさして、常より久しく入るべし、草臥直る也。

(四) 至極草臥れたる時は、風呂に入りて後、足の三里より下、足の裏迄焼酎を吹き附くべし、手にて塗りては利かぬ也。

(五) 草臥れたる時、足の三里、承山、通谷の三ヶ所に灸するも好し、三里は普通大抵の人が知れば更に説かず、知らぬ者は宿屋の亭主或は番頭に聞いても分かれど、其他いさゝか、説明せざるべからず、兩足を爪立つれば、ふくらはぎへ山の始形現はるべく、其山の下が

承山也、又、通谷と云ふは、足の小指の外側に、節の横に當る所也。

其廿二 晴れたる日の徒歩旅行法

晴れたる日の徒歩旅行は最も樂しきものなれど、氣倦み身だるくなり易く、時には、朝出でし時の豫定の如くに行かぬ事あり、されば、朝早く出で、晝前に多く歩み、晝の休みを多く取りて、午後に少しく歩むべしとの教へは、殊に晴れたる日の旅行に肝要也。

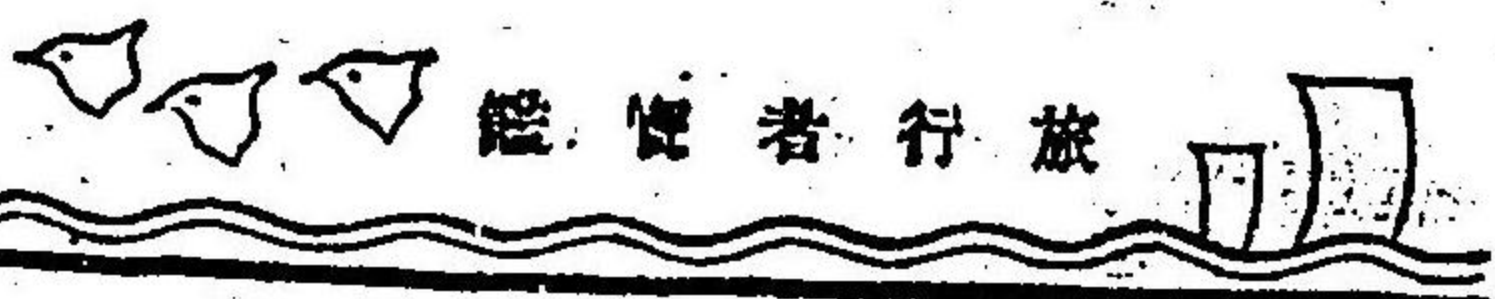
晴れたる日には、左迄泊りを急ぐに及ばず、朝の爽氣のなほ残れる中に、路程の大半を行きて、晝の休みを随分長くし、や、晩の冷氣の催せる頃より、勇氣を出して、一息に泊り迄行きて着くべし。

又、朝に晴れたる日にても、後に風或は雨を催すべし候見ゆる時には、其用意あるべきは勿論、天變に逢はぬ中に成るべく多くの路を歩むべく、急ぎ足にすべし。

其廿三 雨の日の徒歩旅行法

雨の日の土を踏む旅行は、氣倦み身だるさを免れ得べき代りに、濡れて重く、草鞋は泥に塗れて足の運び自由ならず、且つ、草鞋の破るゝこと早くして、取換へる數多き故、路抄らずして草臥れ易し。

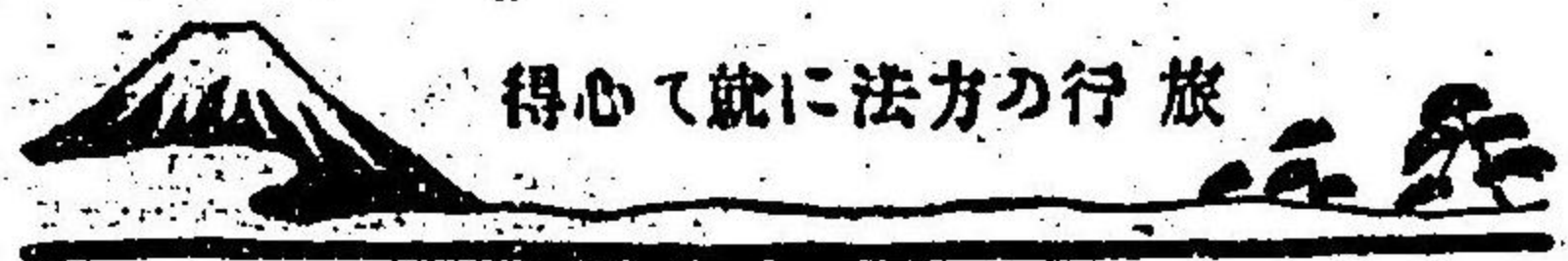
晴れたる日に豫定より多く行くべき事となして、雨の日の旅行は豫定より少きに満足すべし、朝はあまり早さを食ほらず、其代り晝の休みを短くして夕暮前に宿に着き、濡れたる物を乾かすやうにすべし。



雨の日に、旅人皆泊りを急ぎ、殊に、朝晴れて後に雨となりたる時に此傾き多ければ、良き宿屋の塞がらぬ中、又、満員とならぬ迄にも良き座敷の塞がらぬ中、夕飯前より餘程早く宿取るべし。

其廿四 風の日の旅行法

暴風の日には旅行せまじきもの也、されど、已むを得ずして行く時には、木の枝の折れて落る虞れある林の中、岩石の飛ぶ虞れある崖の下、種々の物の飛ぶ虞れある人家軒を並ぶる間、河の岸、橋の上等に、別けて注意すべし。又、埃の目に入らぬやう、身を横向にして蟹行すべし。後より送る風は、強くとも左迄苦にならぬもの也、唯だ、風に送られては自然に身體が前へ進み、驅ける氣にあらずして自ら驅け出さるゝ故、思はずドン



ドン驅け續けることあり、これは心得無き所爲にして、後にて痛く疲るゝものなれば、斯る場合は、腰を据えてゆつくりと大膽に地を踏み占めつゝ歩みを進むべし。

其廿五 雪の日の旅行法

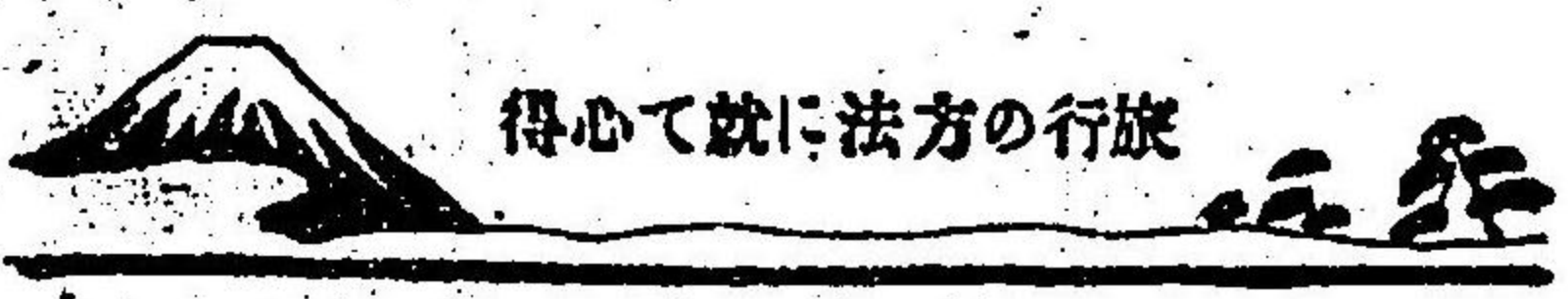
これは、北陸奥羽及び北海道等、雪國の冬季に旅行する場合の心得を説くにあらず（此心得は他の門に於て説く）、何所にてもあれ、旅行を始むる日、或は其幾日目に於て、雪に逢ひたる時の心得を説く也、固く降り積もりたる雪の上にあらず、降りつゝ融くる雪の中を行く時の心得也。

兎に角雪の日の旅行は面白きもの也、面白きものと思つて旅行するを好しとする也、あたりの景色は變つて面白く、白い物はチラリ／＼と面白く降つ

て来る、唯だ、濡れて冷きだけの疵也。

されど、此濡れて冷き疵が馬鹿にならぬものにて、且つ雨の水とはちがひ、時としては外套も着物を透すことがあれば、餘程注意して、輿に乗じて歩き過ぎぬやうにし、晝の休みには、焚火の出来るやうな茶屋に掛くるか、左無くば、惜氣無き火鉢にドツサリ火を起こさせて土間に置き、股火して、冷えたるを煖め、濡れたるを乾かすべし。

午後は二三里を行くに止めて、早く宿に着き、着物を脱ぎて宿屋の寝巻に着換へ、あぶり籠又は炬燵を借りて火に乾かし、己れの身も、風呂に入りて後湯冷めの來ぬやう充分火に煖まり、出来る口なら一銚子焔けさせ、利いた所で暖かく夜着を被つて寝るべし、チトばかり風を引いてもこれにて蒸り、翌



くる日に用ふる元氣を回復し得べき也。

其廿六 途中の休み方

旅行の途中、茶店に腰を掛けて休むにも亦心得無かるべからず。

- (一) 草臥れ、或は渴きたる故、見當り次第選り嫌ひ無しに休む場合。
- (二) それより外に茶店無き故、我慢して休む場合。
- (三) 己れの好める食品が店に在る故、それに引かれて入る場合。
- (四) 好景の地を占めて風致に富める故、それに引かれて入る場合。
- (五) 晝飯を食はんが爲に入る場合。

以上は、途中にて腰を掛くる普通の場合なるが、大體途中の休み方を擧ぐれば

(一)これも研究視察の助けなれば、途中幾度も休むが好けれど、晝飯の爲に休む時の外は、一息繼いだら直ぐに立つが好し、長くとも五分以上に出でざるべし、直ちに買ひ、直ちに食ひ、直ちに茶を呑み、若くは直ちに草鞋を穿き換へ、直ちに代を拂ひ茶代を置き、買ひ乍ら食ひ乍ら呑み乍ら穿き換へ乍ら拂ひ乍ら話し、聽て話を切つてサツサと出づべし、其代り、晝飯の時には、悠々緩々羽目を外して休むべき也。

(二)途中腰を掛けて、何か見聞したる所、又は思ひ附いたる事を、手帳に記し附くる場合には、唯だ心覚えだけとして、物の名、數字などのみ明かに記し、其他は記憶の符號として、全體に對する一角を記すに止むべし、又之に慣るべし。

(三)途中腰を掛けたる時は、多辯なるを好しとす、短き時間に於て、多く云ひ多く聞くべし、茶店其他の店若くは宿屋の主、婢、下女、及び我と同じく腰を掛けたる種々雑多の客と、相手を選ばず、言葉を交はすべし、但し、人に聞かせること少なく、我より聞くこと多かるべし、話上手とならず、聞上手となるべし、此場合人と議論すべからず。

其廿七 宿屋に着き方、風呂に入り方、食ひ方、寝方、起き方

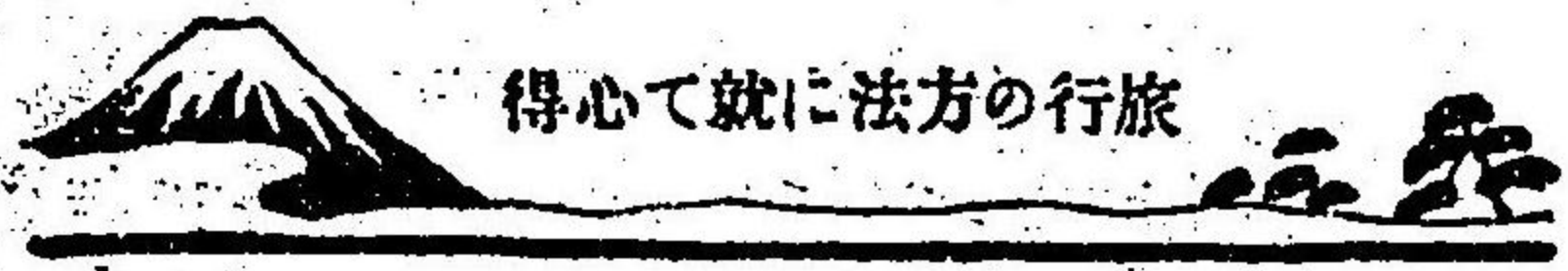
等なるべし、但し、旅中の食物に就ての心得は、別に門を設けて述べれば、こゝには記さざる事とす。



立ち出で方

宿屋の選び方、種々の宿屋に就いての心得等は、別に門を設けて説くべく
こゝにては唯だ左の條々を述ぶるに止めん、

(一)宿屋に着き方 入口に臨めば殷懃に立ち迎へらるゝ場合あり、又
内に入りて此方より「泊めて呉れよ」と申込む場合もあれど、要す
るに傲慢横柄ならず、さればとて馬鹿丁寧ならず、言葉優しく且つ
簡單明瞭なるべし、足を洗はゞ脚絆足袋等を一纏めにしてより、宿
屋の處置に任せ、濡れたらば乾かさせ、泥に塗れたらば洗うて乾か
さしむべし、足を洗ふに及ばずば、下駄其他の履物を正しく揃へて
脱ぎ、荷物は、大きなるを宿屋の者に運ばせ、細かさ物及び頻繁に



使用する物、貴重なる物等は、自身座敷へ運び込むべし。

(二)風呂に入り方 空腹に風呂に入るべからず、食後にても、暫く腹
氣を和けてよりにすべし、されど、泊り客多くして後の差支へにな
り、空腹にても入らねばならぬ時には、先づ足を度々湯にて濡らし
たる上、身を浸し、而も決して長湯すべからず、湯氣に上がること
あるべければ也、又、宿屋取込みて客の前後を取りちがへ、後に泊
りたる者を前にして風呂へ案内することあり、此場合自分若し後に
されたらば、怒らずして其次に入らんことを告ぐべく、若し前にさ
れたらば、其旨を云ひて正當の順番に依らしむべし、なほ、草臥甚
しき時ならば、食後少しく時を置きて、特に湯を熱くさせ、緩々と

入り居るを好しとす、但し、大なる宿屋には、順序を争はずして幾人も入るべき風呂場あれば、各々宜しきに随ふべし。
(三)飯の食ひ方　これは禮法の事を云ふにあらず、又、食物調理の形式と風味とに依つて、土地の人情氣風を窺ふべき問題は、別門に於て之を解釋せんとす、こゝにては唯だ宿屋の飯を食ふに當つての心得を述べし、一體、宿屋の女中が給仕に附いて向うに坐るは、大抵の客をして急いで飯を食はうとの意を起さしむる方あるもの也、向うは何も忙がしいから早く食つて了つて呉れ、ばいと顔に讀まするにあらねど、其忙がしかるべきを思ひ、給仕をして居る間の詰まらなかるべきを思ひ遣れば、どうしても、味も分らず暗雲に詰む

込んで了はねばならなくなる也、是れ旅慣れぬ者の常態也、されどこれはクダラヌ遠慮也、成らう事なら、給仕の女を眼中に置かず、たゞこんな器械と見做すべし、それもヒドイと思はば、矢繼早に此方より問ひを發して、ベチャクチャと喋らすべし、圖に乗つて辯じて居る間に悠々と食ふべし、千言萬語の中、一句にても研究視察の助けとなるならば儲け物ならずや、實際、一方は頻りに口を鳴らしで食ふ、他の一方はヤチンと坐つて黙つて下向きになつて居る、こんな乾燥無味の圖は無き也、但し、二人以上の旅とならばどうしても好し、夫婦其他男女一對の旅行あらば、給仕を追拂ふも亦妙ならん。
(四)寢方　扱て愈々寝褥を展べさせて目を瞑る前に、大事の問題あり、

(1) 磁石に依つて、其地の東西南北の方角を見定め、己れの座敷の何方が東にして何方が西、又何方が南何方が北と、充分に呑込み置き、己れの枕が何方に向ひたるかを記憶すべし。

(2) 家の作り方に大體注目し置くべし、何所が長所にて何所が缺點、又何所が此家に特別なる目の着け所なるかを明かにし、殊に、表裏の出口、其戸締りの様子を知り置くべし、雪隠の案内にも通じ置くを好しとす、是れ古き教にて、出火、盜賊、地震、其他の異變に備へんが爲め也。

(3) 荷物は一固めにして、何時にても持たれるやうに括り置き、指定の錠前附戸棚が、床の間の上か、床の間と並びたる棚の上か、若

くば枕許か、一定の場所に整頓し置くを要す。
(4) 脱ぎたる着物は、袖疊みして枕許に置き、帯と懐中時計とを、其上に並べて置くべし。

(5) 胸巻、紙入等に、金銭及び貴重品の入りたるは、肌に着けて寝るが好く、それが窮屈ならば、薄く平にして、蒲團の下に入るべし而も、敷蒲團一枚ならば蒲團と疊との間、二枚ならば蒲團と蒲團との間にして、其場所は、縦に頭の方より見て、枕より内、頭の下に當る所に横に置く也。

(五) 起き方 朝起きたらば、何を扱て置いて先づ胸巻を點檢し、確と肌に着けたる上、雨戸若くは窓を一枚明け、天氣模様を伺ひ、且の

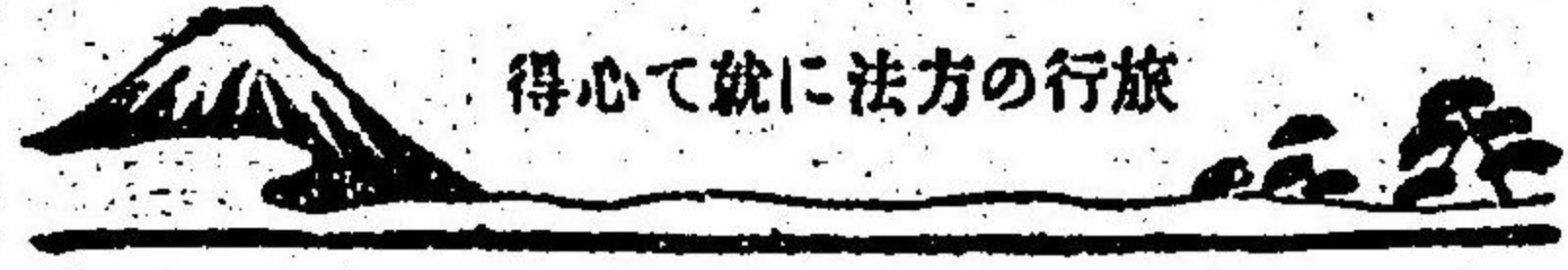
明りと空氣とを入るべし、次には、殘燈を吹き消し、外の明りにて荷物に異狀無きやを確め、然る後便所に赴くべし。
(六)立ち出で方 顔洗ひ口嗽ぎ、宿屋の寢卷を自分の着物に着換へ、股引もシャツも着けて、帯をキリ、と引き締め、宿屋の處置に任せ置きたる脚絆あらば、それも呼び取つて着け、何時にても立出でらるゝやうにしてより、朝飯の膳に向ふべし、而して、朝飯濟まば、直ちに給仕の女に勘定書を命じ、宿錢を拂ひ、茶代をやり、女中に心附けをやるならそれも同時に與へ、宿屋が呉れたる手拭、盃などは、鞆の口を明けて唯だ押込み置き、團扇ならば腰へ挿し、それより直ぐに立たず、二三服煙草を吸ひ、巻煙草ならば、一本吸ひ棄て

二本目の火を附けたる頃、忘れ物無きやと己れに問ひし上、細かさ物は自ら持ち、鞆傘等は女中に持たせて、物靜かに立ち出で、立ち乍ら宿の者共に挨拶して後、草鞋を穿くなり下駄を穿くなりすべし。
其廿八 すべて急ぐ時の心得
旅は心にて急ぐべからず、たゞ抜目無からんことを要す、是れ普通の教へ也、されど、どうあつても急いで多くの路を行かねばならぬ場合あり、此時の心得如何。
(一)宿屋を立ち出づる時、忘れ物の有無に注意すべし、途中茶店に腰掛けたる時は、殊に雨り。

(二) 捷徑は、確實に取調せずして漫りに入るべからず。

(三) 心急げばとして、着物の着方、帯の締め方、草鞋の穿き方等をズンザイにすべからず、途中にて草鞋怪しくならば、直ちに穿き換ふべし、破れかけたる草鞋を半ば引ずるやうにして歩くは、却つて急ぐ時の心得に反す。

(四) 焦りて、多量の食物を短時間に詰め込まんとすること勿れ、咽喉につかへ、舌を焼きなどをすべし、又、短時間に多量の食物を詰め込みて、直に路を急げば、先づ大抵は胸苦しく気分悪しくなりて、急がぬ旅よりも後るべし、落着いて少し食ひ、途中飢を覺えれば、手軽く出来る物を少しづつ、幾度にも食ふが宜しき也。



其廿九 旅中にて買ひ物の仕方

旅中にて買物するは、誰しも無ければならぬ事也、買物する場合を別ちて假に四種となす。

- (甲) 必要の爲めに買求むる場合
- (乙) 趣味の爲めに買求むる場合
- (丙) 必要品を買ふことを勧められたる場合
- (丁) 趣味品を買ふことを勧められたる場合

是れ也。

買ひたる物品の處置方、又は、賣る人の正邪を鑑識する方法などは、各々他の門に於て之を説くべく、こゝにては、買ふ者自身を本位として、之を買

よへる物品との關係を述ぶるに止めん。

(一) 甲の場合

齒磨、石鹼、紙類、鉛筆、毛筆、藥劑、其他種々あるべしが、何れも平生用ひ慣れたる物を取るべく、且つ、大なる手堅さうなる店に就くべし、若し土地に依りて己れの用ひ慣れたる品無くば、それに近き價格と品質との物を選ぶべし、決して、外見美しくして案外に廉價なる物、若くは殊の外高價なる物を買ふべからず。

(二) 乙の場合

所變れば品變る、何でも無き普通の物品器玩にても、土地の風俗と其歴史とよりして、頗る材料と形狀との珍らしきあり又、地方に依りては、古道具屋店頭に於て、他の土地に珍らしく、殊に都府にては高價にても容易く得られぬ品の、二束三文に積み重

なれるを見ること無きにあらず、これ等を買ひ求むるはこの場合也、斯る場合は鑑識眼と鑑識の經驗とを有せる人にあらざる限りは、決して高價なる物を買ふべからず、何でも安くて變りたる物を買ふべし、但し、安物買ひの錢失ひにならぬやう、毀れ易きや否や、他の物品と一緒に置いて、傷を受けず又傷を與へざるか、彩色ある物ならば、割げるか割げざるか、他の物品に色を移さざるか等を確むるを要す。

(三) 丙の場合

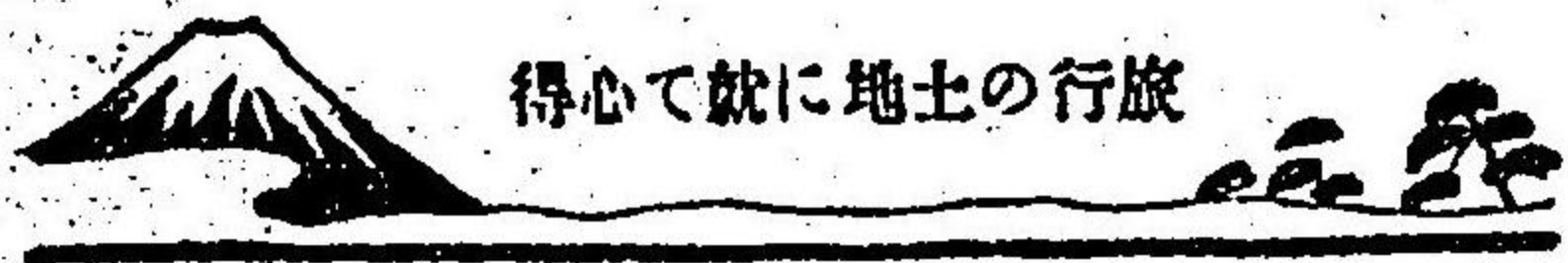
前に擧げたる必要品を賣る者が、宿屋へ入り來りて買ふことを勧め、若くは、途中に於て、飲食店、腰掛茶屋等に於て、斯る商人に逢ふことあり、此場合に於ては、それ等の物品が、平生



自分の使ひ慣れたるものと同質なるか、將た、同質ならずとも極めて之に近きものなるかを檢し、左にあらざば、如何に商人が百千言を費すとも、決して之を買ふべからず、賣藥など殊に爾り。

(四) 丁の場合

此場合は更に深き注意を要す、必要品の己れが日常使ひ慣れたると同質なるかならざるかは、何人も之を知るに苦まされども、趣味に屬する物品に至つては、其價格の標準定まらず、且つ旅客に之を尙むる商人は、概ね一時を胡魔化すイカサマ的の者なれば、餘程氣に入りたる珍らしき品を、先これならば高くないと云ふ値段にて買ひ得る時の外は、如何に買はねばならぬやうに仕向けられても、斷々乎として刎ね着くべし。



◎ 旅行の土地に就ての心得

其一 賑やかなる地を旅行する心得

賑やかなる地とは、大都市、大市場、大開港場等を中間となして、之と接續したる一帯の地を意味する也。

此場合に於ての基本とすべき心得は、目に觸れ耳に觸れる物の爲に心を奪はれて、ウツカリすべからざる事也、己れと云ふ主體を確に存せしめて、どう足を運んで居るかを忘れずば、物にも衝當らず、人とも喧嘩せず、茶屋料理屋にも無理に引張り込まれず、詐僞師惡漢の手にも掛らず、安全に且つ興趣多く、賑やかなる地を旅行することを得べき也。

なほ一つ、時間と關係ある旅行に於ては、賑やかなる地を過ぐる時特に注意せざるべからざる事あり、賑やかなる地を通る時には、兩側及び路上の光景に眼も心も奪はれ、草臥を忘れて自ら歩みの進むものなれば、覺えず數里を行きて、今日は大分路が歩りたりと思ふことあり、されど、其實、歩きたる間の事を忘れしにて、ウツカリあたりを見乍ら歩み、時々珍しき物が目に留まりて立停まりなどしたるに相違無ければ、よく計算せば、却つて、草臥て鈍く歩きし時より多き時間を費したるを發見すべし、故に、午前若しくは午後には必ず何里以上の路を行かざるを得ずと定まりたる時、賑やかなる地にさしかへらば、よく顧みて己れを失はぬやうにするを要す。

其二 寂しき境を旅行する心得

森閑たる山中の、閑古鳥より外啼くものなき所、荒涼たる野邊の、沼澤斷續して、蘆荻と雜草と相連なる所、其他、大河の岸、深林の裡等、人里遠く往來の稀なる所を行くには、人に依つて、非常に淋しく心細がるもの也。必ずしも、風流がりて、旅行の趣味は淋しき所にのみ限ると云ふこと能はず、賑やかなる所亦それに相當したる複雑なる趣味ありと雖も、毫も淋しき趣味を解せざる者は、到底旅行の事を談ずるに足らざる也、故に、淋しき所を行く時は、淋しき趣味を嘗むることを樂むの意を以て、四圍の風物を玩賞するを要す、是れ心得の骨髓也。

淋しき所にて人に逢ひたれば、必ず「今日は」とか「御苦勞様」とか言葉

ホツと息を吐きたりと云ふ色を見せず、一段高く地歩を占めて、重々しく構へ込み、向うが定めし淋しからうと思つて、慰めてやると云ふ態度を取るべし。

又、淋しき所にて偶然道運を得ば、矢張前と同じき態度を取るの外、快然として談笑する中に、相手の性癖剛脆より其素性経歴等を探るべき端緒を披くやうにすべし、但し、自分のそれは毫も探られぬやうになし、圓轉滑脱、巧みに敵の鋒を外らすべし也。

さりとして、固くなりて要心するの風を現はすは拙劣也、何所迄も彼より上手に出で、平氣に且つ物柔かにあしらふべし。

其他、よく淋しき所を通る時に、大聲にて歌ひわめき、又高々と自問自答

をなす者なり、これは「ア、淋しい〜」と泣いて歩くと同じ事にて、見のとも無きこと限り無し、心すべし。

其三 寒國を旅行する心得

日本には冬も暖なりと云ふ所無し、臺灣だけは格別なれど、其他は、暖かなりと云ふも唯だ比較的のみ、故に、冬季に於ては何所を歩いても寒國の旅行の部類ならざるべからず、されど、こゝに所謂寒國は、特に、冬期積雪を見る北陸奥羽地方を意味する也。

寒國を旅行する心得の主眼は、其旅装及び旅行の方法すべて、其地の式に遵ふべきこと也、左も無くて、自ら待み、我流を用ふるときは、痛苦、災害並び至りて、身を損じ命を失ふに及ぶことあるべし、注意すべし。

先づ旅装より述べれば、

(二) フランネル大幅の衿巻 これは頸に巻き、寒氣を防ぐのみならず

吹雪の時には、目ばかり出して顔も頭も包むの用に供すべし。

(二) 手袋 厚く目の細なる毛織の品が好し。

(三) 足袋 これも厚く暖かなるを好しとす。

(四) 外套 防寒且つ防水の力充分なるを取る、着物に粘りたる雪の融

けたるは、水飴の如く布目に透るものなれば、之を弾く力無かるべ

からず。

(五) 藁はじき及び藁沓 寒國の旅には、普通の脚絆草鞋等を用ふべ

からず、それにて凌ぎ得る日もあれど、吹雪して寒氣の甚だしき時、

若くは、晝暖かにして積りたる雪の表面融け、夕暮よりそれに反動して、鐵の如く凍てたる時などは、其地方にて用ふる藁のはじき、及び藁の沓にあらざれば、之に堪へ得ざるもの也、又、爪籠と云ひて、藁にて編みたる足袋の半分の如き物を、足の指に箝め、それより草鞋を穿くも好し、左様なる物を身に着けたること無しとて、漫りに斥くべからず。

(六) 杖 竹杖にてもステッキにても好し、洪水の中を行くが如く、密

雪止まずして路筋見別け難くならば、これにて探り歩くべし。

等を始めとし、其土地の人の教へに随つて、それ／＼用意すべし。

又、雪國の冬期に備へられたる旅行機關には、

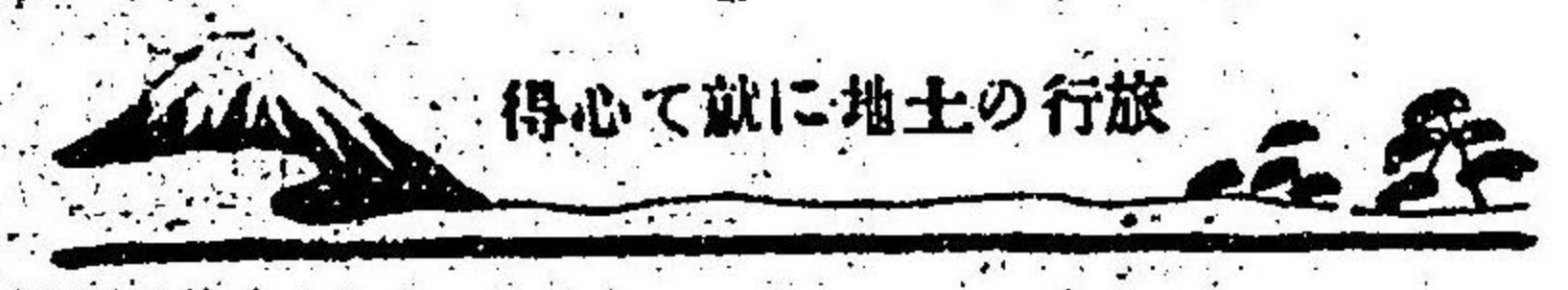


(甲) 雪車

(乙) 馱馬

の二種が普通也。

雪車は、茶杓のごとく先の反りたる薄き木を、二本適宜に離して並べたる上に、大なる箱を据え附けたるが如き物にて、後より之を押す者と、前より綱にて曳く者とあり、雪の上を這りて奔る也、客は、箱の底に藁把若くは藁筵を重ねたるを敷き、それに綿厚き蒲團、毛布を四つ折にしたるが如きものを重ね、膝を折るなり胡坐を掻くなりし、身には外套或は縋袍を着たる上に、一枚以上敷枚迄の毛布を被り、坐ながら江山の雪景を領して、飛ぶが如く這り行く也、予は天下にこんな愉快なる旅行あらじと思ふ、寒國の雪は砂



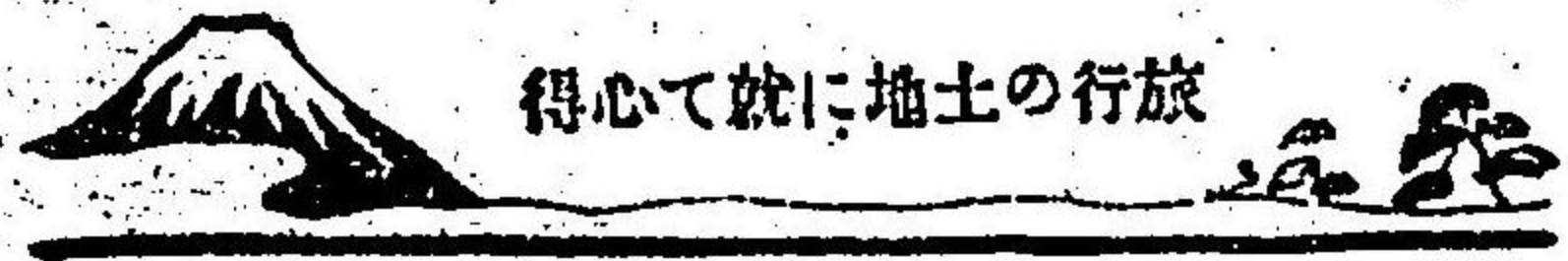
の如く固まりつゝあるものなれば、時々拂へば箱の中へ融け込む氣遣ひ無し安火或ひは寢爐(懷爐の大なるもの)を胡坐の前に置かば、結構更に此上無かるべし。

雪車は、寒國の旅行に於ける暖く快き機關なるが、これと反對に、寒く快からざる機關に馱馬あり、例の荷鞍に蒲團及び毛布を敷きたるに跨がり、一高一低背に波打たせて、人をゆすぶりつゝ鈍く歩む馬に任するなれば、路の抄らぬのみかは、風雪に晒されて寒さ骨に透り、殊に膝以下は己れの物との感覺薄くなり、毛布に包みても何に包みても、保護の出來ぬことあり、又、荒神(旅行の方法に就ての心得、其十一を參酌すべし)ならば、中へ寢爐ぐらゐを入れらるれど、到底雪車の如く身が樂に暖ならず、先づ、已むを得ざ

る場合の外は、雪中馬に乗るの旅行を取るべからざる也。

次に、寒國の旅行に就て心得べき事の大略を左に述べん。

(一) 路を踏み違ふべからず 寒國の冬にても、比較的緩みたる日には、綿の如く柔かき雪降れど、大抵は砂の如き粉雪にて、地に落ちても或る時間は固まらず、それに加へて風吹くこと強ければ、空中の雪の外、地上より倒まに落し、空を蔽ふ雪なり、これが爲め、涯なき一白の地上に引かれたる線路は見別ち難くなる也、斯る場合、案内知らざる者が漫に歩きては、動もすれば路を踏みたがへ、風に運ばれて地の凹所に溜りたる粉雪に腰以上胸迄も埋ることあり、或は、粉雪に蔽はれたる下の氷を踏破りて、田の中、溝の内に陥り、凍え



渡りて身體の自由を失ひ、遂に命を失ふに至りし例もあり、故に、冬期寒國の旅行には、必ずスタッキ或は長き竹杖を持ち、縦令一面に雪に蔽はれたりとて、道筋だけは他の部分とちがひ、中に心ありて固きものなれば、杖にて探りて行きて、早く人里に出づへし。

(二) 食物を携帯すへし 寒國冬期の旅行には、寒氣と戦ひ、風雪を犯して進む故、飢を感ずること速なるもの也、又、非常なる風雪の日には、各家戸を閉ぢて、いづれが飲食店なるや見定め難きことあり故に、必ず焼飯の如きを風呂敷に包み、着物の下シャツの上に、背中より腹に廻して、胴へ括り着くべし、空腹なれば寒氣に犯され易く、心神昏々として路に倒ることあり、注意すべし、又、胡椒を

携へて、寒氣に苦しむ時一粒噛みて吞めば、身に温まりを生ずと云ふ。

(三)決して酒に酔ふべからず 寒國雪中の旅には、寒氣を凌ぐと稱して、上戸は勿論、下戸迄も強めて酒を煽りて元氣を附くる習ひなるが、これ程危険なることは無し、大酒すれば、一時は身熱して寒氣を忘れ、勇氣出て、吹雪を事ともせずと雖も、漫りに進んで、道路にあらざる雪中に踏み込み、千鳥足危くしてヒヨロ／＼と打倒れ、其儘にて起き上がることも能はざる中に、酒醒めて身體冷たくなり、遂に凍え死するに至る也、此例甚だ多し、慎むべし、酒に酔はざれば、繼令雪吹に志巻かれて一夜を雪中に明かすとも生命にかゝること無し。

と無し。

(四)凍えたる時の重要なる心得 雪吹に逢ひて手足利かなくなり、又氣分悪しくなりたらば、宿屋、茶屋、其他附近の民家に就き、藁火を焚いて貰ひ、初めは遠火にて温むべし、左なくば、風呂の湯を極温くして貰ひ、之に入りてより次第に熱くさするを好しとす、(五)寒國雪解の頃の注意 寒國にては、數ヶ月間降り積みて、路を高くし山を太らしたる雪が、春暖地脈に動くと共に、底の方より搖ぎ初め、先づ地と密接したる縁が離るゝを以て、山の傾斜をなしたる所は、轟然たる凄まじき響を合圖に、周圍數百間の積雪一時に崩れ落ちることあり、之を雪崩と云ふ、人馬若し此下を通る時は、忽ち打

倒されて埋没すべし、故に、此際山路を通る時は深く注意し、若し山の斜面の雪に異状を認むる時は、急いで其下を駆け通るか、崩れて仕舞ふを待つかするを要す、漫然として通行すべからず。
(六) 寒國旅行と食物との關係 寒國の旅行には、別けて食物に注意すべし、宿屋、飲食店等にも其心時あるべきが、己れも求めて鳥獸肉、鶏卵、牛乳等の滋養物を食ひ、身體を暖め、血液を殖やすやうにし、旅中決して酒色を食ふべからず。

其四 熱地を旅行する心得

夏は至る所暑けれど、日本の内地には、こゝが熱地と特に指すべき所ある無し、尤も、臺灣の南部を旅行することある時、及び、同じ夏の暑さの中に

ても、比較的其度の高さ四國九州の或る部分を行く時の心得として、注意すべき個條あれば、并に一通り述ぶることすべし。

先づ熱地を旅行するに當つての旅装より述べん。

(一) 第一に帽子を擇ぶべし 炎天熱地の旅行には、頭腦を保護すること

と第一の心得也、随つて、何よりも先づ帽子を擇ぶべし、それには、

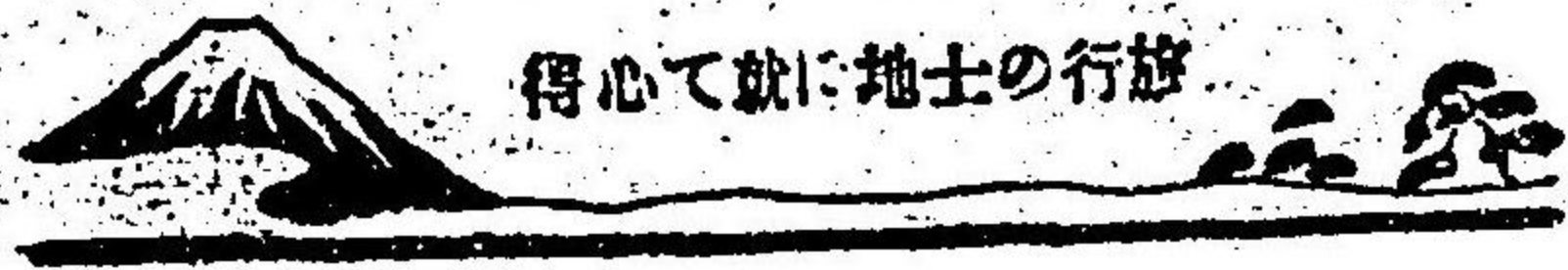
あれのこれのと云ふよりは、麥稈の固く切立つて鐔の狭さを取るが好し、光澤ありて組織の緻密に、日光を反射するを尙ぶ也、但し、風に奪はれぬやう紐を附べし、其他の帽子は一得一失ありて、中には價頗る高く、すべての人にすゝめ得ざるもあれば、多くの點より見て麥稈が第一也。



(二)次に着衣を擇ぶべし 着衣は、白地の單物の洗ひの利くのが好し、

帷子、絹地等は、炎天に晒さるれば却つて暑く、瓦斯絲織其他木綿を故らに薄くしたるものは、ベト／＼肌に着いて具合悪しきもの也、縮も、品に依つては、日々旅行する中に、肌を磨れて心地好からず、チト手厚き木綿の白紵(滿洲がすりと云ふやうなもの)が一番也、なほ、肌には網シャツが最も好けれど、成るべくは、單物の外何も着けぬを好しとす、時々肌を脱いで汗を拭くことあるべければ也、但し、洋服ならば、薄きセルの宜しきこと、旅行に經驗深き人の云ふ所也。

(三)其他身に着くる物の選び方 炎天熱地の旅行には、別けて注意し



次に携帶品の事を述べべし。

(一)最上の武器 開いては日を防ぐべく、疊んではステッキとなすべ

て腹部を保護すべく、其爲めフランネル製の腹巻を固く締むべく、帯は、腹巻に重なるやうにして、キリ、と引結ぶべし、縮緬若くはメリンスの大幅を好しとす、餘りに細く輕きは宜しからず、其他、草鞋穿きには縮の股引、普通のコハゼにて合はする脚絆等を要すべく、殊に、足には厚き刺足袋を好しとす、薄き足袋を穿さては、夏は殊更草鞋に足を噛めるべし。

き、頑丈なる洋傘を携ふべし、絹張の白つぼきものか、絹綴張が好し、毛織子の黒などは却つて日を吸うて悪し、持たぬに劣れり。



(二) 靴 出来得るだけ軽く小き物を肩より下げ、在中の品は、成るべく少くなし、且つ小きを選ぶべし、若し間に合はざれば、靴などを携へぬ方が好し。

(三) 藥品 胃腸の要心として、重那、硝蒼、格末の合劑、解熱の爲めのアンチピリン、山の井戸、谷川の水等を、渴いて飲む時に用ふるキナエン、胡椒、及び蚤避け粉等を携ふべし。

第三に旅行其物の心得を擧げん。

(一) 歩く事 朝夕に多く歩みて、日中は休むべし。

(二) 食ふ事 煮て置きたる物、焼きたましの物、餡入の物、食ひ慣れぬ物、生物の古びたる、是等は決して口にすべからず、煮立て焼立



ての暖なる物、生ならば極めて新しき物を取るを要す、若し是等の點に於て適當なる物無くんば、生鶏卵を吸うて食事に代ふるか、生鶏卵に醬油を加えたるものを、温なる飲にかけて食ふべし、又、餡餅が何よりの好物なる甘黨に於ては、草津の姥が餅、駿州の安倍川餅と云ふ如く、音に聞こえたる名物にして、原料新しく、拵へたる傍より直ちに賣るゝものならば、満腹せぬやう食ふも好し。

(三) 飲む事 咽喉が乾いても成るべくは茶だけに置いて置いて貰ひたし土地に依りて名に響きたる清水あり、往來の人争うて之を飲むを見れば、相當に試みるも好ければ、路の傍に在る井戸の水、山より落る水、谷川の水等は、成るべく飲まぬやうにすべく、已むを得ずして

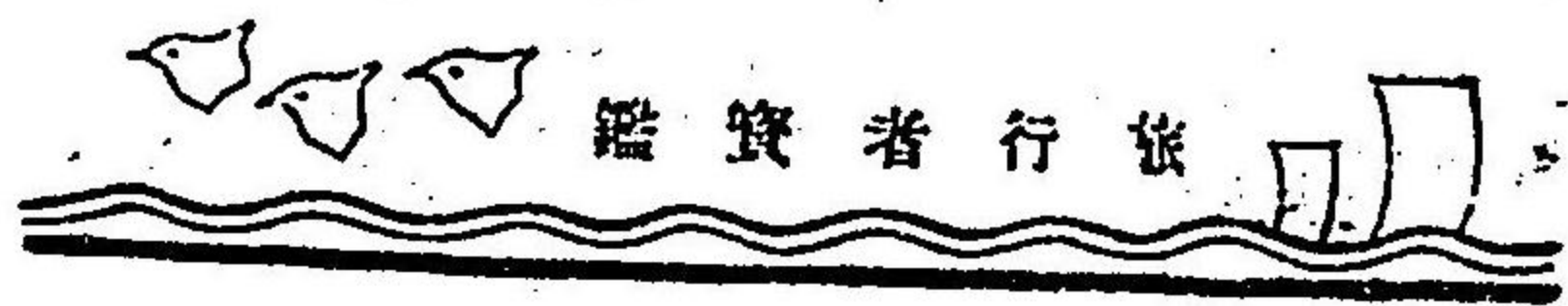
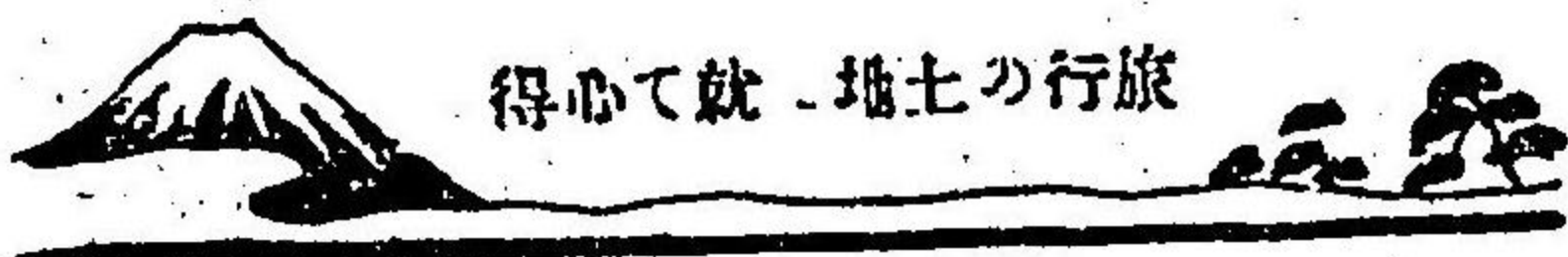
飲むも、必ず器物に汲みて、少許のキナエンを投じ、沈澱せしめたる上にすべし、又、水を飲む時胡椒一粒を噛みださして服すれば毒を受けず、水を噛みて飲めば中らずとは、古への教へ也。

(四) 憩ふ事 暑熱と疲労とに悩まされたる人は、木陰の涼しき所、叢の柔かなる所を見れば、たまたらずそこに身を投げ出して休み、果は、いゝ心持にグウ／＼身を掻くことあり、これ決して爲まじき事也、熱地の夏期には毒虫多ければ也、又、古宮寺の茂りたる林中の巖窟、水邊の湿地等は、涼しと云ひて長く休むべからず、かやうなる所には、毒濕の氣極めて多きことあれば也。

(五) 寝る事 熱地の夏期には、宿屋の夜具より濕毒を受ることあるも

のなれば、龍腦、麝香等香氣の高きものを身に附けて所持すべし、これは毒虫避けにもなる也、殊に、道中の賣女には濕毒激しき者ありて、暑中は最も感じ易きものなれば、色慾を慎みて之に近づぐべからず。

(六) 蚤の事 終日炎熱と戦ひたる揚句、下等なる宿屋に着きて蚤に苦しめらるゝは實にたまらぬもの也、されば、携へたる蚤避粉を蒲團の周圍に撒くか、左も無くば、野山によくある苦參(さつねのさげ)と云ふ草を、歩き乍ら手折りて持ち、宿屋に着いて寝る時、之を撈りて蒲團の周圍に撒くべし、苦參は藤の如き葉にて、夏赤小豆の花に似たる花を開き、秋角豆を小さくしたる如き實を結び、充分



生長すれば高さ五六尺に至る、又、枳實一つ持ちて、夜々抱き寝れば蚤寄らずと云へど、これは餘り當てにならず。

(七) 病の事 暑氣に中りて心身に異常に異ならば、アンチピリンを服して熱を拂ふべし、足の裏熱し痛まば、蓼の葉を摺り、其青汁を塗るべし、又、帽子或は笠の下に桃の生葉を入れて冠れば、暑氣を受けざること妙なりと、昔の人は云ふ、なほ、毎朝胡椒を一二粒づゝ服せば、夏霍亂をせず、冬吹雪に倒さるゝことなしとぞ。

其五 山の奥を旅行する心得

山の奥は、數里の間人家の途切れたる所あり、絶壁と急流との間に、路險しく危き所あり、毒蛇横たはり惡獸出づる所あり、されば、此間を旅行す

るには、また特別の心得無かるべからざる也。

(一) 其間を過ぐる中に日の暮れざるやう、時を計るべき事。

(二) 其間を過ぐる中に飢渴を覺えざるやう、前に於て充分に飲食すべき事。

(三) 其間を過ぐる中に草鞋の破れざるやう、新に穿き換へたる上、更に一足を豫備に持つべき事。

(四) 毒蛇惡獸の出没する所を過ぐるには、竹杖の先を割りたるものを以て、大地を打鳴らしつゝ歩むべし。

(五) 其間を過ぐるに臨み、日既に暮れても、必ず行くべき要のある時には、炬火を振り照らすことを忘るべからず、今日の時代に於て昔の

如き炬火は急に作ること能はずと雖も、カンテラの大き目なるものを竹の先に結び着けて、高く掲ぐるが好し、成は、ブリキの油入の小形なるものを求め、木綿糸を適宜の太さに燃り集めて、口より中へ差込み、これを心として火を點すべし、提灯より此方が好し。なほ、山の奥の往來稀なる所を通るに當つて、最も注意すべき事あり、開

材木を山の上より下らせ落す場合

に遭遇したる時也、杣人などは随分無法なるが多く、或る場合には公道を私占するを憚らずして、高所より山の斜面に材木を瀑布の如く敷き詰め、一本づきの材木を其上に走らせて下すことあり、此時は、大抵下の路に番人居て、

通行の者あれば聲を掛けて上へ合圖し、暫く材木を落すことを控へさせられど、中には無法極まる態度にて、番人も置かず漫に木を落して顧みざる者あり、迂濶に通りは、之に打たれて身體泥の如くならざるを保せざる也、故に、此危険を避くるには、大聲を擧げて山の上に居る者に人の通るを知らしめ、山の上より通つても好しとの答へありて後、驅ける迄に及ばざれども、足早に歩み過ぐべし。

其六 山越の旅行の心得

東海道ならば箱根に鈴鹿、上州は碓氷、甲州にては笹子と云ふが如きは、堂々たる天下の公道に當れりと雖も、之を越ゆるに勞力を費さざるべからざる、山越の險路なれば、相當の心得ありて可也、況んや、多摩川の上流より

大菩薩峠を越えて甲州に入り、日光の奥より上州に越ゆるが如き枝道は、全
國至る所に在り、其半ばは、山奥を旅行する心得を應用すべしと雖も、それ
以上、峠を越えて彼方に降りる場合にだけの心得無かるべからざる也。

(一)「旅行の方法に就ての心得」の部「其十七、路の歩き方」の中「九、
山坂の歩き方」を參酌すべし。

(二)豫め、登降の路程、其道路の様子、他の山路と異なる特點の有無等
を取調べ、之に應じたる準備と覺悟とあるべし。

(三)登り始めは緩々と歩みて、成るべく息を切らさぬやうにし、頂上を
目當てにせずして、其半ばを目當てにすべし、目當てにしたる所に
着かば、暫くそこに休み、扱てそれより再び、頂上迄を二つに切り

て、其半ばを目當にし、前より早き足取りを以て歩むべし、目當て
にしたる所に着かば、矢張前の如く休み、今度は大に勇氣を鼓舞し
て、頂上迄唯一飛の勢ひに馳せ、峠の茶屋に達してより緩々と休む
べし。

(四)降り路は、峠より下を望んで近く見ゆる割合に行かぬものにて、歩
いて見れば案外に遠く、其爲め氣草臥に草臥れて仕舞ふを常とすれ
ば、先づ全路程の三分の二の所を目當にして、それ迄一氣に、足を
軽く小股走りなし、残る三分の一を更に二つに切りて、其半ばを目
當に前より緩く歩み、それより麓迄の残る半ばは、尙ほ一層緩々と
歩みて、麓の宿場或は村落に入るを要す。

(五) 峠の茶屋、半腹其他山中の腰掛所に於て、名物若くは土地に多く産する物に屬せる食品あらば格別なれど、左も無くば、生鶏卵を求めて吸ふの外、餘計の物を口にすべからず。

其七 海濱を旅行する心得

海濱を旅行するに二種の道路あり。

(甲) 海に沿ひたる普通の道路

(乙) 波打際の砂の上

是れ也、甲は別に心得を擧ぐる迄も無く、唯だ風景を賞美して愉快に行くべし、乙の場合に就いては、いさゝか注意を要する也。

(一) 「旅行の方法に就ての心得」の部「其十七、路の歩き方」の中「十

一、砂の上の歩き方」を參酌すべし。

(二) 海濱の砂の上を歩くは、興味と共に路の近さを取るものなれば、損に歩かぬやうにすること肝要也、それには、何地より何地迄の波打際に行くには、途中に川が幾筋あるか、其中幾筋は徒歩にて渡られ、幾筋は本道へ上がりて橋を渡らなければならぬか、又、徒歩にて渡られぬ川は幾筋目のそれなるか等を、豫じめ聞き置き、其川や、近くなれば、斜めに路を取りて、橋の所に上がるべし、川の傍に至りてより、岸傳ひに橋を指すは少からず路の損也。

(三) 途中何村或は何町に上がりて晝飯を食ふべしと定まらば、豫め、其地の前より上がるべきか、其地に近づきてより上がるべきか、其地

の半ばより上がるべきかを研究すべし。

(四) 徒歩にて渡るには、海に近き程底淺しと知るべし

其八 海上を旅行する心得
船に依るの外、海上を旅行する方法無し、されば「旅行の方法に就ての心得」の部「其五、汽船旅行の心得」「其十二、汽船以外の船の旅行に於ける心得」等に於て、此問題は既に解釋せられたり、讀者を右の條項に就て見よ、而して、予をして重複を避けしめよ。

其九 深林の中を旅行する心得

深林と云へば、固より本街道にあらず、枝道若くは間道也、如何に深き林の中に拖かれても、本街道にて車も馬も通る所ならば、別段の心得を要せず

と雖も、枝道若くは間道のそれに於ては、大略左の心得あるべし。

(一) 深林の中には、萬古乾くこと無き泥濘の部分あることあり、心無くして入るべからず、腰迄埋る所もあれば也、かゝる部分は成るべく藪中を迂回すべし。

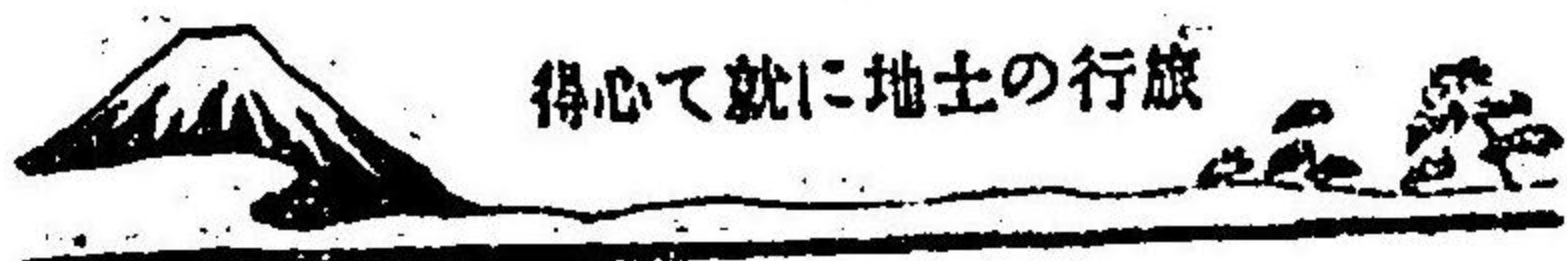
(二) 深林の中には陰濕瘴毒の氣の籠もることあり、ブランデー、ウヰスキー等の強き酒を少し携へ、濃氣に逢ひ、若くは氣分薄したらば一口チビノとやるべし、且つ、始めて通る深林は、決して夜中に歩むべからず、朝夕も成るべく控へて、日中だけにするが好し。

(三) 深林の中は夏も暑からず、大暑と雖も、朝夕は酷冷の氣身に迫るものなれば、其他の期節の冷たきことは云ふ迄も無し、これに陰濕瘴

毒の氣が加はりては、人體に不利なれば、衣服外套等に就て、豫め其心得あるべし。

(四) 峭冷の氣、陰濕の氣に中てられて、氣分宜しからざる時、若くは中てられんとする時は、杉葉の枯れたる、其他乾きたる落葉を集めて、往來の真中に火を焚くべし、腰を下して休む時も斯くすべし、但し、路傍或は道ならぬ所にては、決して火を焚くべからず、山火事を起す虞れあれば也。

(五) 深林の中には、山蛭、蛇等の害あることあり、注意すべし、又大なる蝦蟇を見ることありとも、みだりに驚き恐るべからず、決して人を害せざれば也。



右は、惡き方面のみを擧げて注意を試みたるものなるが、深林の中は決してたゞ惡きものにあらず、太古より凝つて散ぜざる靈氣を包んで、之を吸へば鎔けたる玉の如く肺腑に浸徹する、幽寂の極、夜中に歩むが如く、湖底を行くが如くなる、氣收まり神澄み、深岩を發し、道念を生ずる、是深林の旅行より得る所也。

其十 絶壁の上下を旅行する心得

山を切り開いて通じたる絶壁の下の路、上の脇腹を繞りたる絶壁の上の路等は、大雨の最中及び其後、雪解の頃等に、通行を見合すべし、崩壊することあれば也、又絶壁の上より、十數丈乃至數十丈の下を流るゝ谷川を眺めんとするに當りては、必ず路の端に大石或は大木の峙ちたる所を足場とすべし、

土のみの端若くは石垣の所に出づべからず。

其十一 大河の岸を旅行する心得

大河の岸を行くには、安全に見ゆる所にて、左にあらぬ所にて、すべて絶壁の上を行くと同じき心得あるべし、雨後出水の時には最も爾り。

其十二 湖沼の間を旅行する心得

山中の火口湖に傍うて行くには、絶壁の上を行くと同じき心得あるべし。平地の湖沼は、附近に水分浸潤して、濕氣多く、蚊蚋其他の小虫に毒を有ちて人を刺すあり、又病毒を媒介するあり、殊に、湖沼に連りたる森林に此害ある例多し、又、悪瓦斯發生して人を毒する所もあり、注意すべし。

其十三 廣野の中を旅行する心得

廣野と云うても、日本に於ては左したる所無し、されど、其心得の大略を

擧げん。

(一) 廣野に於ける本道と副徑

廣野は、本道の外、並木の左右に傍うて、芝生、藪中に拖かれたる副徑あり、所に依りては、これが三四條より六七條に及ぶ也、是れ、本道の車輪馬蹄に荒されたるを厭ひ、雨の時に泥となるを厭ひ、單調にして變化無さを厭ふ多くの人の情が期せずして、相一致するの所、足跡を重ねて自然に路となりたるものにして、何れの地の野中にもこれ無さは無し、左れば、車に乗りたる時の外は、歩行にても駄馬にても、此副徑に依るを好しとす、此場合馬鹿正直に本道のみを行かねばならぬと云ふこと無し。

(二) 廣野の旅行と趣味

廣野の旅行は、無趣味なる人間に取つて頗る痛苦なるもの也、「飽き」して仕舞ふ」と云ふ、「何所迄行つても同じ事だ」と云ふ、されど、前に擧げたる副徑に依るときは、趣味を解する人に取つて、興涯り無く多きもの也、本道は並木に眼界を狭めらると雖も、副徑には此障得無く、野を圍む四山の、尖れるもの圓きもの、木に蔽はれたるもの、草に包まれたるもの、雪を戴けるもの、争うて我に揖して應接に暇あらず、其裾のあたりと點綴する村落、其懐より立昇る炭焼く煙等、いづれか趣無かるべき、況んや、春は徑を挾んで萬種の草萌え、夏より秋にかけては、萬種の草花に虫の聲、單調どころか、これ程複雑多趣味なるは無き也。

第十四 丘陵の上を旅行する心得

丘陵委蛇として、大洋の波の如く、緩く登り緩く降りて限り無き所は、概ね低き所に溪流ありて橋を架し、中には、橋の傍に家あり、家の後に森ある等、眺へ向きの所もあり、又、高き所には、豆、麥、蕎麥、粟等の畠あり、飛びく人家もあり、思ひ掛け無き所に古き石碑立ち、六體地藏の辻堂あるなど、可なりに變化あり、變化に随つて可なりに趣味あるもの也。されど、其可なりの變化の幾つも似たやうに重なるのが、單調よりも却つて激しく厭倦の情を刺戟するに至り易きものなるを如何せん、故に、此場合に於ては、景色を大觀せずして、細かく咀嚼するを要す、第一の低所と第二の低所とを比較して其差を見、第三の高所と第四の高所とを對照して其別を

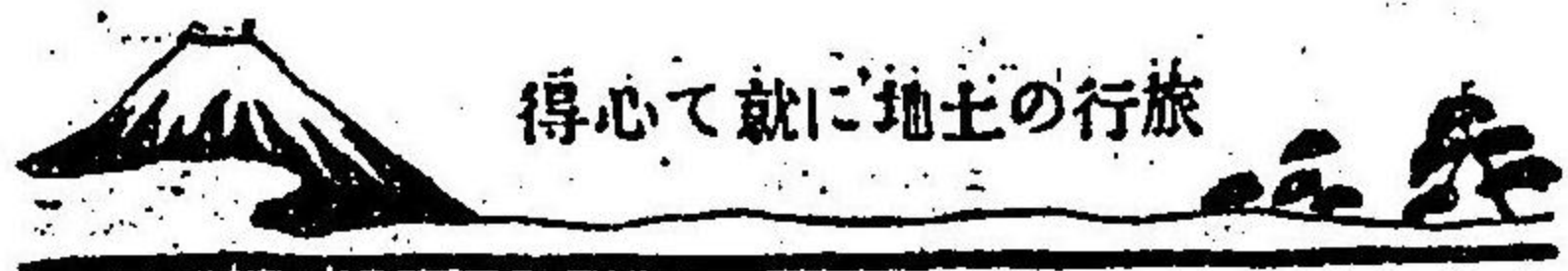


知ると云ふやうに、一木一石皆斯る觀察を下すべし。左すれば、丘陵の起伏何所迄續くとも、決して厭倦の情を催すまじし。

其十五 好景の地を旅行する心得

好景の地は、旅人にとりて精神の食物を供せらるゝ所以也、これあるが爲めに、旅は愛いものと思ふ。食旅行の徒も、旅を苦しきものと思ふ。旅商人も、精神的に餓死するを免るゝ也、況んや、單に好景の地を履まんが爲に旅行する者なるに於てをや、而も、單に好景の地を履まんが爲にするの旅行は、最も旅行の本義に合へるものなるに於てをや。

好景の地を踏みたる時に於ては、全心全力を擧げて、これより與へらるゝ興趣の應接に任ずべし、又、之に全心全力を擧ぐることを能ざる、用件或は窮



餘の旅行に於ても、出來得るだけ多くの心と力とを之に割くを要す、旅行の能事こゝに盡くれば也。

なほ、好景の地にも二種あり。

(甲) 日本三景、及び江の島、舞子の濱と云ふが如く、價の定まりたる好景の地

(乙) 其名毫も聞こえずして、通行の際偶然發見したる好景の地

是れ也、甲の地を踏みたる時には、唯だ穩當の態度を以て、尋常に之を觀覽すべく、若し名の高き割合に實の劣りたるを見れば、漫りに之を罵らずして、靜に其爾る所以を研究すべし、又、乙の地を發見したる時には、細かに其實地を探討して、己れ自ら充分に興味を嘗むると共に、之を世人に紹介し得る



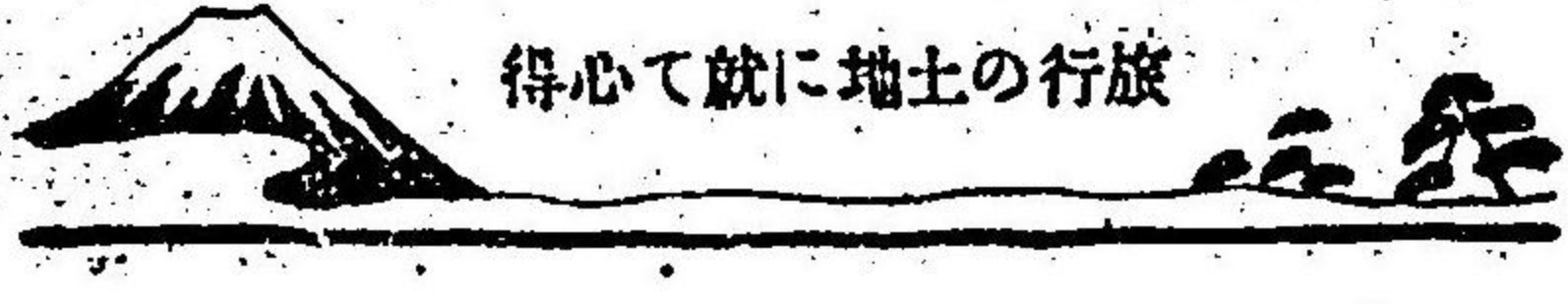
やうの材料を整備するを要す。

其十六 平凡の地を旅行する心得

平凡の地とは、好景の地に對しての稱呼にして、要するに、好景ならざる地と云ふの意味也。

人或は、風景を以て天下に鳴るの地、及び、一國一郡に歌はる、勝地にのみ注意を拂ふこと多くして、それ以外の部分は輕々に看過す、此輕々に看過せらるゝ部分、即ちこゝに所謂平凡の地也。

されど、風景は必ずしも有名の地にのみ好きにあらずして、無名の地亦好景無きにあらず、寧ろ、天下に有名なる勝地は、趣味低き一般の人に喜ばるゝだけ、幾分の俗氣を有するを常とすれど、無名の地に見出さるゝ好景は此



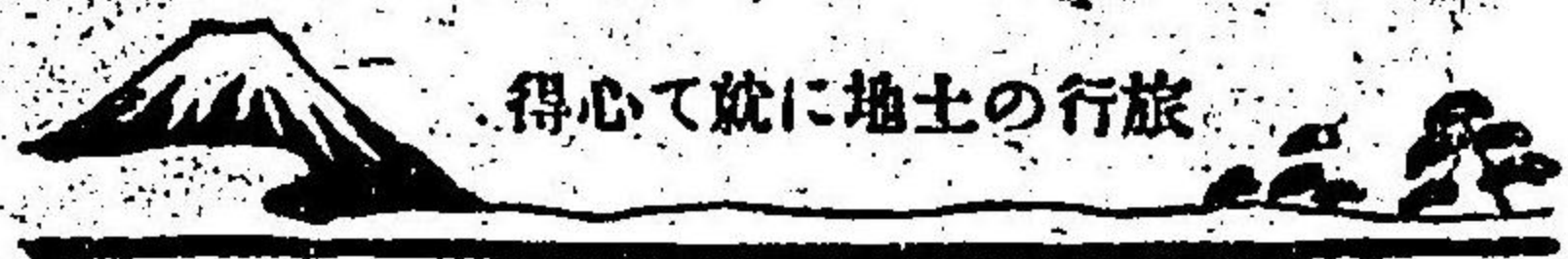
弊を有せず、極端に云へば、如何なる平凡の地、單調の景にても、細かに玩味することに依つて、隠れたる趣致を見出すこと多かるべし也。

故に、所謂平凡の地に行くにも、決して旅行の趣味の少かるべきを憂へず、自己の眼を以て、平凡中より却つて深き趣致を見出さんとの希望に満たされ、怡然として之に向ふを好しとす。

其十七 乾燥の地を旅行する心得

地勢聳多て水に遠き、若くは砂多く水少なき等にて、乾燥せる部分あり、雨降るも忽ち乾き、晴れたる日にはすべての水分速かに蒸發す、かゝる地を過ぐるには

(一) 渴きを防ぐべく水分に富みたる果物を携さへ、若しくは、吸筒に沸



かしましの水を入れて携ふる事。

(二) 足の裏の熱して痛むことを防ぐべく、足袋の底に鹽を入れて穿く事。等の心得あるべく、乾燥の地を夏期に過ぐるには、一層此心得を強度にすべし。

其十八 卑濕の地を旅行する心得

これは、「其九、深林の中を旅行する心得」「其十二、湖沼の間を旅行する心得」等を參酌して然るべき心得あるべし。

其十九 瘴癘の氣のある所を旅行する心得

これも、前同断也。

其二十 流行病の所を旅行する心得

旅中、流行病の區域を通行する場合、流行病ありと知りつゝも、已むを得ざる要件ありて其地へ旅行する場合、共に適當の心得無かるべからず。

(一) 身體に就ての注意 若し自己の身體健全ならず、殊に腸胃の常ならざる時には、流行病ある地に向つて旅行すべからず、流行病の區域を通過することも、亦成るべく避くべし、又、健全なる者にてても、此場合は、斷えず胃腸に注意し、少しく常に異ならば、直ちに、重那、硝蒼、格末の合劑を服すべし。

(二) 食物に就ての注意 流行病の區域を通過する時には、己れが携帶したる麵包、果物等の外、成るべく土地の物を飲食せざるべし、されど、其流行區域の延長、平日程乃至一日程、若しくは數日程に及

び、必ず其間に於て飲食せざるを得ざる時には、宿屋或は飲食店が面倒がるを顧みず、先づ食器と沸湯とを呼び、自ら茶碗、皿、箸の類を之に浸して消毒したる上、充分に煮沸したる物のみを取りて食ふべし、煮冷し、焼冷し、生物等は、決してく食ふべからず。

(三) 宿泊に就ての注意 旅行病ある地には、如何様にしても宿借らぬが上分別也、されど、どうしても、泊らなければならぬ時には、食物を右の如くなしたる上、寝る時宿屋の寝巻を取らず、己が着物を用ひ、手拭二筋のアルボース石鹼若くは他の石鹼にて洗ひ乾かしたるを、一は枕掛けとなし、一は夜着或は掛蒲團の襟に、針と糸とを借りて二三個所縫ひ着くべし、便所に行かば、決して手水鉢の水と

手拭とにて手を清むべからず、必ず別に取りたる水にて、石鹼を用ひ洗ひたる上、己れの手拭にて拭くを要す。

其廿一 悪獸毒虫の出没する所を旅行する心得

日本にても、昔は狼、山犬等の出没して、旅人を害せし所あり、又、嘘か真か知らざれとも、二丈三丈の大蛇現はれて、人を呑み、或は噛み殺してふ話あり、今はそれ程の事無けれど、なほ、深山を歩かばたまに狼に逢ふべく、北海道及び奥羽には熊棲み、臺灣に至らば豹、山猫等を見るべし、更に我が勢力範圍なる朝鮮には虎も居る也、巨蟒と云ふ物、近頃誰も確に見たりと云はざれど、毒激しき蝮、烏蛇の類の特に多き所はあり、山蛭の害の恐るべき所もある也。

されば、斯る土地を旅行するに當つての心得を定むること肝要也、其五、山の奥を旅行する心得」を參酌して、大略左の如く注意すべし。

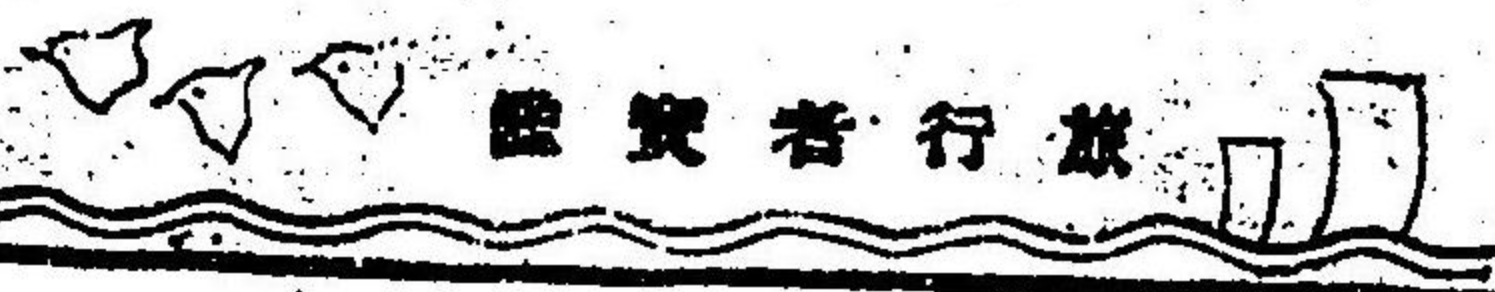
(一) 惡獸毒虫の出沒する所は、すべて晝行きて日のある中に過ぎ、必ず夕刻より夜に入るべからず、夜に入らざれば滅多に危きこと無し。

(二) ビストルにても、痲瘋玉にても、何か音のある物を携帶すべし、唯だ其音だけにて獸を驚かし、逃げ失せしむるにとどむべし、逃げることは受合也。

(三) 蝮などは、夏の夕、路傍の草中に潜み居て、人の足音を聞くや、不意に飛び出だし咬み着くものなれば、足許に氣を付け、左右の草藪に目を配り、油斷無く身を構へつゝ歩み、横より飛び出だしたらば、

身を躲はしてやり過ごし、それより後は、其儘放任して歩みを進むるか、蛇を踏み殺すか、何方にても御勝手也、元來蛇は疾きやうにて鈍きものなれば、飛び出してからにても、身を躲はすの餘地は十分にある也。

(四) 蛇其他毒虫に噛み着かれたる時には、直ぐに、疵口へ己が口を當て、血を吸うては吐くこと幾度もし、口の屈かぬ所ならば、指にて直ぐに搾り出し、然る後、用意の石炭酸膏若しくは寶丹膏を擦り込み、手拭を割いて繃帯に代用(繃帯を所持せば更に結構也)すべし、それにて大抵好さるものなれど、なほ異狀を生ぜんとするの傾向あらば、近き町村に急ぎ行きて醫師の手にかゝるを好しとす。



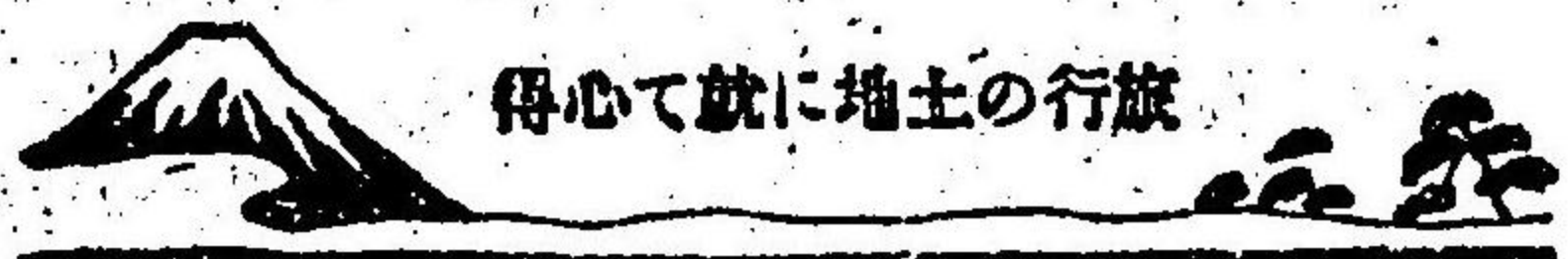
(五)如何にしても夜行すべき必要に勝つこと能はざる時には、「其五」に述べしが如く、速成の炬火若くはカンテラを點し、これを振り照らして進まば、悪獸毒虫盡く散じて近づかざること妙也。

其廿二

風俗の淳朴なる所を旅行する心得

旅行中は、各地の人情風俗を觀察研究すべきこと勿論なるが、こゝにては其方法を説くにあらず、唯だ、通過する土地の人情風俗の如何に随つて、之に對する態度を二三に述べざること述ぶる也。

文明の風は、山陰海隅至らぬ隈無く吹き渡ると雖も、僻地を尋ねれば猶ほ淳朴なる舊風を留むる所無きにあらず、旅客之を訪へば、知ると知らざると、知れる者の紹介あると無きとに拘はらず、一樣に之を厚遇して、殷勤懇篤を



極め、毫も修飾せざる辭色に、真情却つて流露し、人をして、我が叔父母と兄弟姉妹とのみを以て組織されたる村に來れる感あらしむるあり。

旅行して斯る土地に至りたる時には、肯て他のむづかしき心得を要せず、たゞ、己れも全く胸襟を開き、城府を撤して、正直なる叔父さん、忠實なる兄さんとなり、自然に出づる談笑を以て、一時其家族と同化し、己れ先づ他家に在るを忘れて、其家をして今吾他郷の知らぬ人を宿したることを忘れしむべし、家族の食ふ物を食ひ、家族一同の夜職あらば、己れも遊び半分之手傳ふべし。

斯くて、其間は、觀察研究てふ事をも忘るゝ迄に打興するが好し、特に觀察研究の態度を取らずとも、其間より自然に吸收し得たる材料は、後に至り

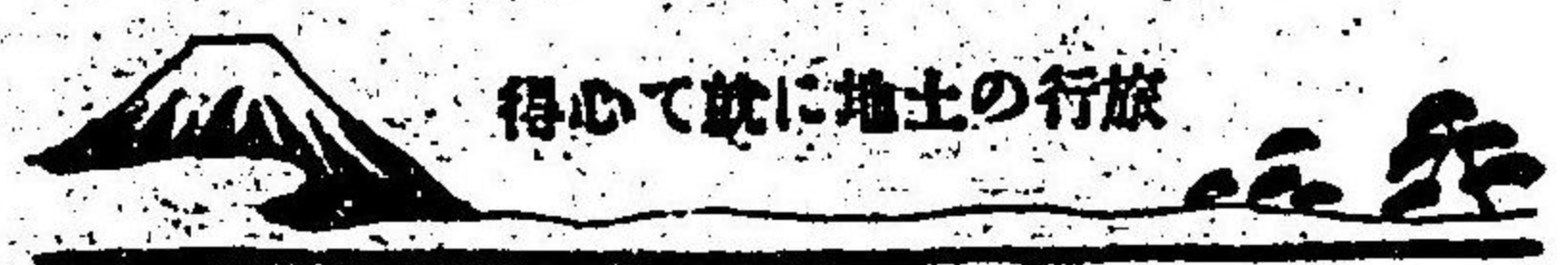


て皆活きて用を爲さん。

其廿三 人情の輕薄なる所を旅行する心得

城市は扱て置き、縦令山奥の三家村にても、野中の一軒家にても、すべて人情輕薄にして、意地悪く冷ややかに旅人を待遇する土地あり。物を問へば、五月蠅げに要領を得ぬ事を云ひて、それ以上は相手にならず、物を買へば、故に粗悪の品を擇びて、ペラ棒に高價に賣り、宿屋などは、表面いやに型に嵌まりたるが如く叮嚀にして、内實の冷淡不親切言語に絶するあり。

かやうなる土地を通過し、若しくは宿泊したる場合は、己れ自ら己れの手を處理して、出來得る限り人手を借らぬやうにし、成るべく、何所にても大



差無き、値も性も分かりたる品のみを買ひ、食物には最も注意を拂ひて、一々箸にて打返し突開き、品質左迄粗悪ならぬを、充分に煮沸し、且つ不潔の痕無き物のみを口にすべし。

最も身體に注意し、かゝる土地にて病に罹らぬやうにすべし、煩つたら見じめ也。

決して、其意地悪く冷かなるに腹を立つべからず、詰責し叱咤する等の事固く無用也、かゝる氣風の土地なれば、それが喧嘩の本になりて、多勢の爲めドンナ目に逢はざるか、測り知り難し、又、それを當り前と思ふ土地の氣風なれば、却つて、詰責し叱咤する者を無法となし、アペコへに憤慨するやも知れず、心すべし。

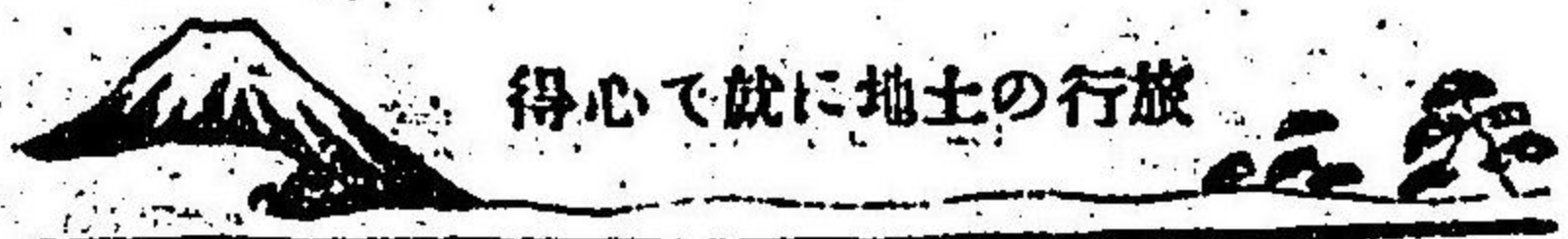


斯る場合には、冷靜に自己てふものを保ちて、何事にも感情を激動せしめず、斯る土地の人情を味はふも亦一興と、前條の場合と正反對に、全然觀察研究の態度を取るを要する也。

其廿四 氣風の殺伐なる所を旅行する心得

所に依りて、其氣風甚だ殺伐に、斬つたり打つたりが常なるあり、喧嘩に勝ちたる手柄話、人を苦めたる自慢話のみ盛にして、それ以外の話題は、土地の人間をして熱心に耳を傾けしむること能はざるあり。

かゝる土地を旅行するには、人と衝突せぬやう注意し、往來は勿論、飲食店、宿屋等にも、詰責叱咤、其他傲慢の態度あるべからず、萬事物柔かにすべし、さりとて、あまりにキョトクしたる臆病の態度を取り、又物柔か



に失して意氣地無く見ゆるやうにするも宜しからず、瀾達洒落にして談笑自若、些事を眼中に置かずして、これが爲に怒り、恐れ、憂ふる等の事無く、よく物を容るゝの人となるべし。

至極の小人にあらざる限りは、旅中だけ力めて右の如き態度を取り得ざるにあらざるべし、而も、總て是れ人物修養の手段となるべし。

其廿五 氣風の因循なる所を旅行する心得

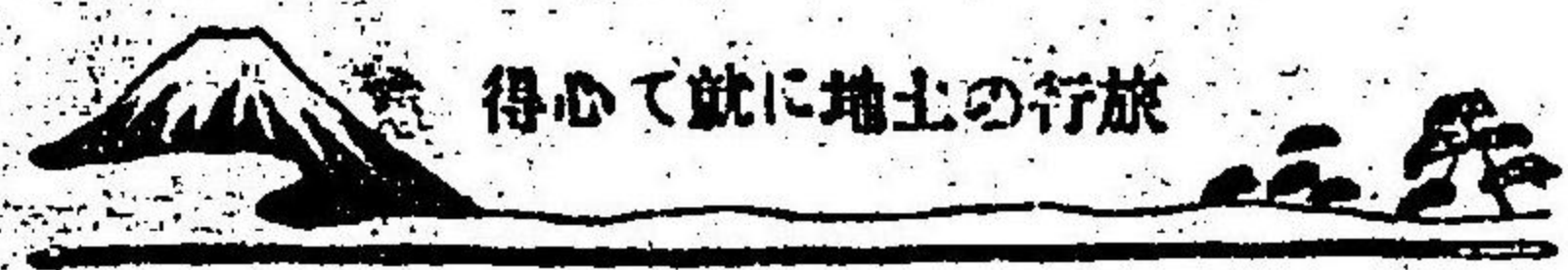
これは前と反對の態度にて、物事すべて、鞭撻督促の態度を取り、詰責叱咤を其間に挿むべし、左も無くして彼等の爲すに任せば、日々事を誤まり時を失ふべし、但し、瀾達洒落を土臺となすべきことだけは前に同じ。

其廿六 親切なる人間の多き所を旅行する心得



土地に依りて、愛想好く親切なる人間の多きあり、かゝる土地の内容は、國家社會の寶として、長く其儘に保存したきもの也、否、すべての人に、之を保護して長く全からしむる義務ある也、淳朴なる氣風も亦尙ぶべしと雖も、これは、早晚皮相的文明と化合して面目を改むべきものなれば、是非無し、されど、一般の風潮に連れて進歩しつつ、而もなほ親切なる人間の多き所は、人々これを敬重し稱揚して、彼等をして之を守り之を傳へざるを得ざらしむべき也。

故に、かゝる土地に至りては、相戒めて、人々の親切に乘じ、彼等に損害を與ふるの要求をなし、又之に狎れて、彼等に迷惑を感ぜしむるを願みず、甚だしきに至りては、親切を利用して彼等を詐偽する等の事無きやう、嚴重



に注意すべし、若し、斯る輩のありたるを聞かば、一面に於て、出來得るだけ誠實の態度を以て土地の人々を慰問し、他の一面に於ては、かゝる敗徳劣悪の徒に對する制裁として、其罪惡を天下に鳴らし、又、其天下に鳴らしたる結果を土地の人々に示すべし。

其廿七 奸惡なる人間の多き所を旅行する心得

博徒、破落戸、壯士等、人を恐喝し詐偽することを營業となす者の多き土地あり、殊に、案内知らぬ旅人に向つて手段を試むるは、勞少なくして功多きを常とすれば、彼等は好んでこれをなす也、旅人の心無くして斯る土地に入るは、鳥の網に赴くが如くなるのみ、豈危険ならずや。故に、かゝる土地を旅行するには、心得べき個條一二にして止まるべから

ゆる也。

(一)土地の人間との交渉 車にても徒歩にても、成るべく斯る土地の人間と交渉せずして通過するの方針を取るべし、已むを得ずんば、飲食買物等に於ても、成るべく交渉を少なく時間を短くし、事少く言葉少なくすべし。

(二)車、馬等を勧められたる場合 車、馬等を勧められても、一切之を刎ね附くべし、而も、素氣無く、荒々しく刎ね附けず、笑ひ乍ら底に力を持ち、婉曲に且つ強く答ふるやう斷るべし、強請るやうに嚇すやうに勧めても、決して憤りの色と恐れの色とを示すべからず。

(三)物を押賣されたる場合 物を押賣する者なりとも、決して五月蠅がりて眉を蹙めず、洒然として之に對すべし、冗談乍らに、外柔かく内強く刎ね附け、彼をして、文句を云ふべき引ッ掛りどころ無からしむべし。

(四)奉加帳を押附けられたる場合 かゝる土地にては、道路或は神社佛閣の修繕、若しくは新築、左も無くば、土地に功勞ある人の紀念碑を建つるなど、稱し、怪しき奉加帳を振り廻して、事情を知らぬ旅人を要し、寄附を迫る者に逢ふことあり、之をも五月蠅げに取扱はず、至極結構の企てなるを稱揚して後、折悪しく旅費の外餘裕無ければと斷り、且つ、穩かなる中にビクともせぬ度胸を見すべし。

(五) 喧嘩口論の事

總じて、斯る土地にては、喧嘩口論を慎むこと第一の心得也、斯る土地にては、喧嘩口論になり易き場合多きものにて、斯く仕向くるは向ふの手なれば、これに乗らぬやうにすべし、さりとして、戦々兢兢と憶病なる態度を取るも、向ふに乗せらるゝ虞れあれば、度量を廣くして何物をも容るゝと共に、膽ツ玉を太くして何事にも驚かず、而も、滑稽洒落にして圓轉滑脱なるを要す、かゝる地にて喧嘩口論なしては、撲られても蹴られても、懐に手を突込んで金を奪はれても、皆自分の損也、道理も理屈も立つものにあらず、警察も巡査も頼みにならざる也。

其廿八 嚴格なる氣風の所を旅行する心得

一體に風紀の頹廢したる今日なれど、なほ、古へ其地の誇りたりし偉人賢者の教へを守つて、氣風の比較的嚴格なる所無きにあらず、斯る土地を通過し、若くは宿泊する時に於ては、一入言行を慎み、決して見苦しさ失策無きやう注意すべし、なほ、之を機會として自己の修養に資する所あるべし。

其廿九 淫靡なる氣風の所を旅行する心得

今日に於ては、大抵の土地が淫靡也、されど、それは尋常なるを以て致方無し、たゞ、淫靡なるが中にも最も甚だしく風俗の壞亂したる所を旅行する時に當つては、いさゝか其心得無かるべからざる也。

(一) 單絶に嚴格なるべからず、土地の者に窮屈がられて、冷遇或は惡意の待遇を受くる虞れあれば也。

(二) 酒々落々として、よく談じ、よく笑ひ、而も、締める所は厳しく締め、一毫も之を緩めて、淫靡の氣風の侵入に任すべからず。
(三) 身を低くし心を高く持ち、局外者として観察研究するの態度を取るべし。

其三十一 他と異りたる特殊の風俗習慣ある所を旅行する心得
地方に依りて、日常の生活より往來交際、冠婚葬祭等の風習に、著るしく他と異りたる特殊の點を見出だすことあり、故に、斯る土地に向つて旅行を試むる時に當つては、必ず左の二條の心得を忘るべからざる也。

(甲) 風俗習慣上、土地の人が忌み嫌ふ言行は何々にて、又、喜び受くるそれは何々なるかを、豫め聞き知り、之に應じたる適宜の舉措あるべし。

るべき事

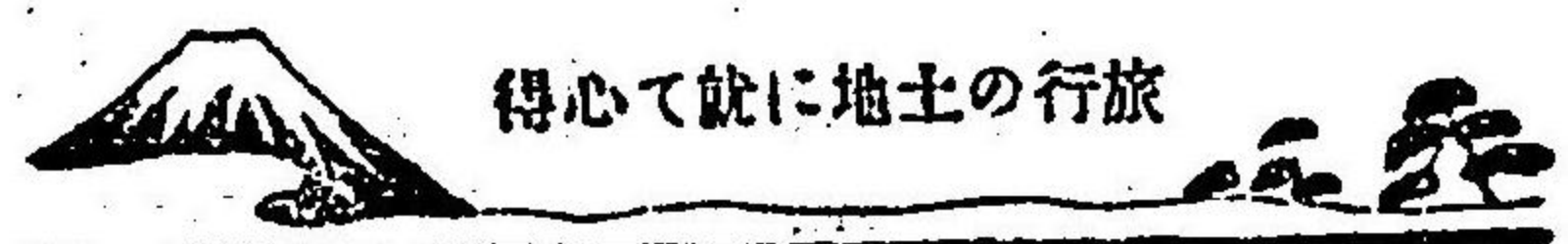
(乙) 其特殊の風俗習慣を、種々の方面より観察研究するべき事。

其卅一 宿屋の好き所、及び其悪しき所を旅行する心得

旅行する土地に依りては、一般に宿屋の設備完全にして、其待遇の懇篤なるあり、又、一般に宿屋の設備不完全にして、其待遇の粗末なるあり、これに就ての心得を述べん。

(一) 一般に宿屋の好き所にては、己れの目にて見て、氣に入りたる、趣味のありさうなる家に泊るべし。

(二) 一般に宿屋の悪しき所にては、其地に入る前より、其中比較的何と云ふ家が宜しきやを問ひ、二三の人の云ふ所の一致したるを取るべし。



し。

(三)宿屋の好き所にては、宿屋に着く前特に用意を要せずと雖も、其惡しき所にては、蒲團の襟と枕とに掛くる手拭の用意宜しきか、蚤、南京虫等を防ぐ用意宜しきか、食物の粗惡なるに對する用意宜しきか等を點檢して後、宿に入るを好しとす。

其卅二

飲食物の好き所、及び其惡しき所を旅行する心得
旅行する土地に依りては、一般に飲食物の良好なる所と、又、其粗惡なる所とあり、之に就ても各別の心得あるべし。

(甲)飲食物の良好なる所に於ては、只管土地の名物、及び其家自慢の料理を求めて食ふべし。

(乙)飲食物の粕惡なる所に於ては、主として生鶏卵を求めて食ひ、其他は梅干、味噌漬の香の物等を取り、若し二人以上の旅行ならば、特に鶏一羽割かしめて膳に供すべし。

◎旅行の季節に就ての心得

其一 松の内の旅行

松の内の旅行は、年始の爲め他の地へ赴く場合か、左なくば、温泉或は海岸の暖かなる地に、寒さと人とを避くるかの場合也、いづれにしても、呑氣に愉快なるべき旅行に相違無ければ、期日と金銭との定限を越えざる範圍に於ては、充分呑氣に愉快にやるの外、別に心得べき事無し、但し、次に述べ



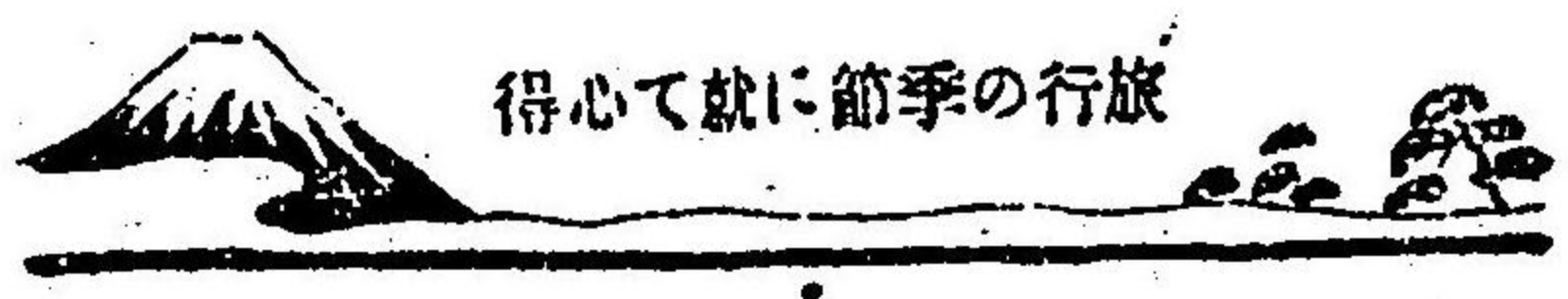
る「極寒の旅行」の心得を参酌すべし。

其二 極寒の旅行（雪中の旅行をも含む）

これは「旅行の土地に就ての心得」の中「其三、寒國を旅行する心得」を参酌し、然るべく其心得を定むべし。

其三 梅花の頃の旅行

梅花の頃の旅行は、用件の爲めと行樂の爲めとの別無く、すべて趣味多きもの也、高き山には雪ありて、風は針を含むが如く鋭く寒く、麥の芽纔に綠に、露の莖ほのかに黄なる外は、滿眼なほ冬枯の景色の儘なる中に、梅花先づ春を代表して開く、如何なる無趣味の人にも、之に對して、人間世界に金と色との外の意味あるを覺らざるは無かるべし。



されば、梅花の頃には、宜しく梅花の趣味と調和したるの旅行をなすべし、梅花の趣味は

(一)に清高

(二)に寒素

也、故に之に調和したる旅行をなさんには

(一)成るべく質素なる旅装をなす事。

(二)徒歩を多く、旅行機關に依るを少なくする事。

(三)脚絆草鞋に竹の杖、必ずしも上戸ならずとも、腰には瓢箪、花に對して腸に澆ぐ冷酒の趣味を解せざるべからず。

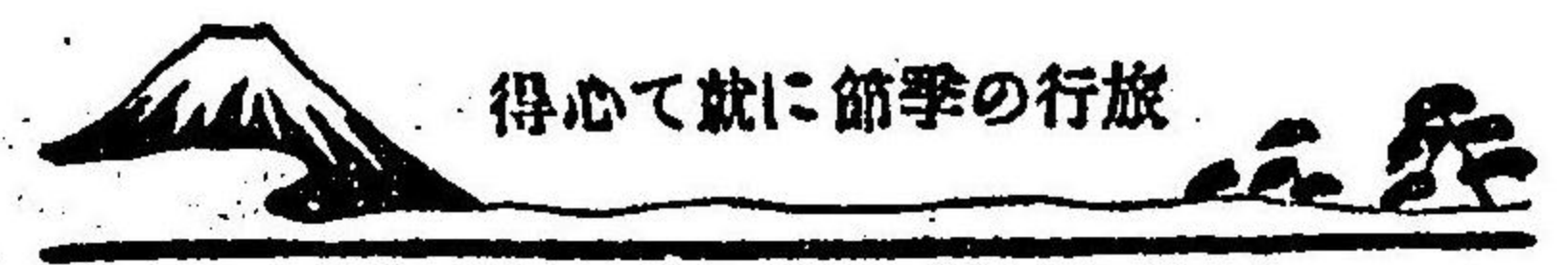
(四)手帳鉛筆にても好けれど、成るべくは、矢立の墨に懷紙の古風を取



るべし。

(五)宿屋も、質朴にして氣品ある、舊御本陣と云ふが如き、古く大なる家を選ぶべし、斯る家には、必ず、古書畫か、古刀古甲冑か、古記録か、古器物か、何れにしても、折り來りたる梅花一枝を之に添へて鑑賞すべき什物あるべし。

(六)途中の飲食は、梅花を帶べる腰掛茶屋にてしたゝむべし、焼豆腐と鯪との煮びたし、或は、梅の皮を剝ぎ來つて焼きたるが如き枯魚など、亦惡しからず、若し梅花を帶べる腰掛茶屋無くば、責めてもの心ゆかしに、比較的梅花に近きそれを擇ぶなど、亦風流なるべし。



(七)旅宿の燈下に、梅花を嗅ぎつゝ、日記を作る、何等の趣味。等の心得あるべく、なほ、以上は行樂の旅行を主として述べたるものなりと雖も、用件の旅行も亦其用件を妨げざる程度に於て、此心得を心得となすべし。

其四 桃花の頃の旅行

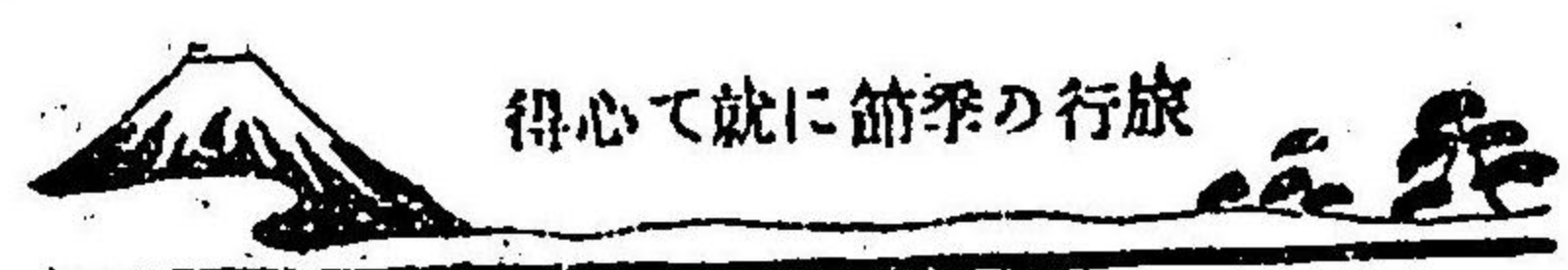
桃花の頃は、春色漸く調ひ、春意や、熟す、梅花の趣味とや、異れりと雖も、亦行樂の旅行に適す、而も、菜の花の之を助くるあるを以て、桃花の頃の旅行は、野廣く畑多き田舎を歩くを好しとす、されど、山間の桃亦好からざるにあらず、溪流に傍は、桃源の趣あるべし、故に、行樂の旅行にても用件の旅行にても、桃花の頃には桃花を見出すことを趣味となすべし、略に

鶏の聲を帯べる、雨過ぎて色鮮かなる、此花亦棄て難き也、旅行の心得は梅
花の條を參酌すべし。

其五 櫻花の頃の旅行

櫻花の頃の旅行を用件のためせねばならぬ者は不幸也、否、縫令用件の
爲めにても、櫻花の頃に旅行の機會を得たる者は幸福也、櫻花の頃の旅行
は、縫令用件の爲めにするものにも、必ず多量に行樂の性質を含ましむべ
し、櫻花の頃は實に天が日本人に行樂の期として與へたるもの也、全日本
至る所、何れにか櫻花無からん、櫻花の頃は、何人も必ず遊樂的旅行を試み
べき也。

然らば、これが心得如何と云ふに、要するに極めて單純也、極めて重きを



置くべきが故に却つて單純なる也、唯だ、財用の耐ふる限り、時間の許す限
りに於て、すべての力を擧げて遊樂に盡くすべき也、全心全力を擧げて花に
遊び花を樂むべき也。

其六 若葉の頃の旅行

若葉の頃の旅行は、極めて好き方面と極めて悪しき方面とあり、好き方面
は、満眼の新緑花よりも美しく、空氣濕潤にして日光五彩をなし、如何にも
落着ありて含蓄深き景色となり、遅櫻藤の花山吹、其他名の知れぬ花其間に
點綴し、溪流之を貫き、飛瀑之に掛る等、却つて春に優れる趣無きにあらず
と雖も、悪しき方面より見れば、風温く氣重く、頭熱し痛みて、時としては
之が爲めに旅行の興味を奪はるゝに至ることあり、豫め其心得ありて、腦の



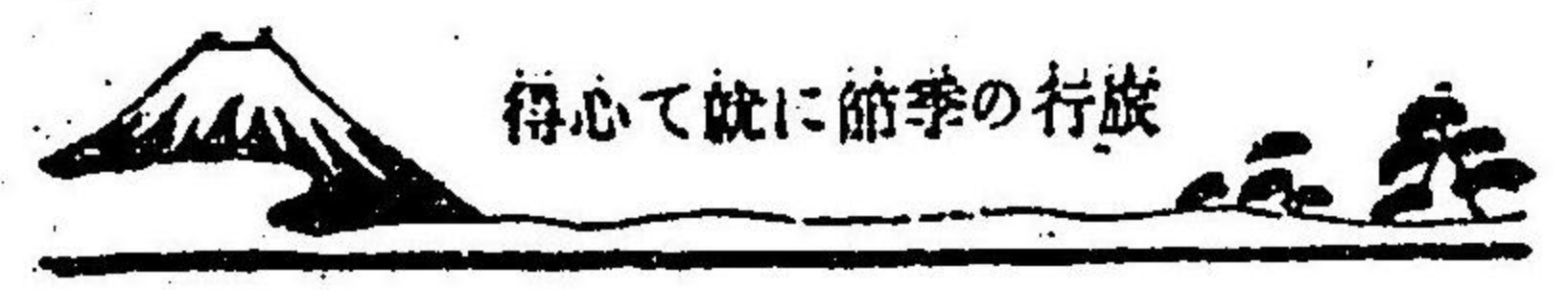
悪しき者は相當の用意をなすべし。

其七 梅雨の旅行

梅雨の頃の旅行は深き注意を要す、濕氣と溫氣との爲に、左無きだに身體の具合悪しき時にて、殊に、すべての微菌の發育盛なる期節なれば、旅中餘りに濕氣を受けぬやう注意し、濡れたる着物は體溫を以て乾かすべからず、又、濕氣に中てられぬやう、ブランデー、ウヰスキー、若くは上等の燒酎を少量に服用するも好し。

其八 炎天の旅行

これは、「旅行の土地に就ての心得」の中、「其日、熱地を旅行する心得」を參酌し、然るべく其心得を定むべし。



其九 新秋の旅行

所謂新涼郊墟に入りて燈火親むべきの候、日中は却つて夏の半ばより暑けれど、朝夕秋氣の人に迫るを覺ゆる時節也。此時節の旅行には種々心得べきことあり。

(一) 秋を尋ぬべし

至る所、夏と秋との新陳代謝を見、夏が如何程退いて秋が如何程進めるかを、一稜の風、一草の態、一葉の搖さにも細かに認め、森林、沼澤、廢墟、籬落に、秋の正體を探り尋ぬる心あるべし。

(二) 身を護るべし

長き夏の間炎熱と戦ひて、心身疲勞せる上の旅行なれば、注意の必要一通りならず、弱り加減なる腸胃は、盡の燒さ

附くるが如き秋暑に乾きて、切りに水分を要求し、矢鱈に水を飲みたる果に、下痢などを催すこと、却つて夏の半ばより多し、なほ、晝暑く夜涼しき温度の變よりして、或は風邪に犯され、爾らざれば、寢冷えてして下痢を生ずることあり、慎むべし。

(三)朝と夕

此時期の旅行は、日中休みて、朝と夕とに多く歩むを要す、而も、趣味の方面より見れば、最も夕に行くことを尙ぶべし、

野には薄に桔梗女郎花、虫は叢に啣きて、露深き所には古寺の灯ともる、軽く高さ風は夕焼を吹き冷して、月は露に色あるが如き白みを有つ、鴈渡る聲もあるべし、砧打つ里もあるべし、新秋の趣味は實に日入りてより後に在る也、されば、此一刻千金の價を空うせず、

詩中の天地を旅人と呼ばれて、全く夜に入る迄歩むにあらすして、真に旅行の趣味を解する者と稱せらるゝこと難し。

其十 明月の頃の旅行

中秋明月の頃は、其價值正に櫻花の時節に匹敵す、此際若し真に旅行の趣味を解する者ならば、風神高朗、玉闕より出て來れる人の如き態度を以て、月明に錫を飛ばすの意氣を用ひ、草臥れ果て、眠くなる迄歩くべし、歩かざるを得ざる也、明月の頃(明月の前後數日間を含む)は、空さへ晴れば、人は早く眠らぬもの也、宜しく夜に入る迄旅行を續くべし、馬・車・徒歩、共に各々異りたる趣味あり、宿屋の眠らぬ前に着きさへすれば好し、瀛車ならば、終夜月と共に奔るべきのみ、それ等の埋合せには、晝寢にても朝寢にて

もなすを許さん。

其十一 紅葉の時節の旅行

紅葉の時節の旅行は、やゝ寒し、朝には霜白く、夕には露紫也、此時節は、人々氣盈ち體健なる時にて、空氣爽にして、肉を活かし、靈を醒ます、況んや、常盤木の外は、葉々盡く錦を織り、流水を白銀の繩となして之を束ぬるあるをや、秋は凡ての物に透徹して其毒を消し、山野河海の産物、盡く取つて食ふべし、實に、紅葉の時節の旅行は、單に遊樂の爲めなる時に於てさへ、自然に遊樂以上の意味を含むもの也、手をして敢て曰はしめよ、紅葉の時節の旅行は、人間の任務として、事業として、已むを得ざる障害あるの外、何人も之を爲すべきものなりと。

紅葉の時節の旅行は、用件の爲めに方向をそれに定められたる時の外、海に行かず野に行かずして、必ず山に入るべし、山の高所を窮むるも好しと雖も、主として溪谷の間を行くを要す、必ずしも日光、鹽原、碓氷なるを要せず、何れの地の何れの山にても好し、尙ほ、紅葉の外此時節の風致と趣味とを成す絶好の物には、柿の實の朱丸と菊花の黄白とあり、秋興云ふべからざる也。

其十二 風の頃の旅行

風の頃の旅行は、蕭颯の風物亦棄つべからず、杜甫の神、芭蕉の髓、共に收めて這裡に在る也。

而も、此時季の旅行は、方面に随つて心得方に相違あり、遠く西伯利亞の

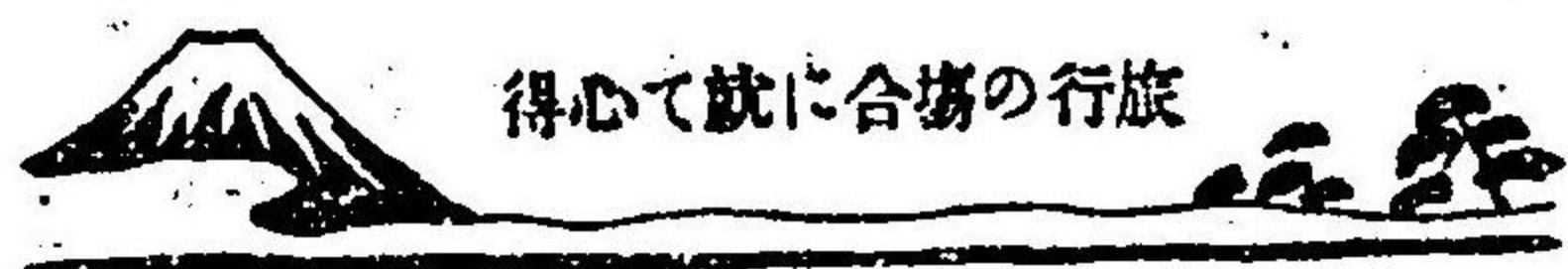


凍地より日本海を飛過する北來の寒風は、脊梁山脈に逢うて水分を吸收せられ、それより乾燥して前方に進むを以て、風の時季に於ては、日本海に面せる裏日本一帯の地に於て連日陰風雪霰を見、之に反して太平洋に面せる表日本は、至る所連日の快晴を見る也、故に、旅行の方面の表日本なる、將た裏日本なるかに依つて、全然其方針を別にし、旅裝、旅行法、旅中の心得等、一々根本的に異ならざるを得ずとなす。

以上の心得ありて後、蕭颯の風物を愛する態度を以てせば、風の頃の旅行亦興味多からん。

其十三 年末の旅行

寒を避くるの旅行、人を避くるの旅行、金を集むるの旅行、此三つの外に、

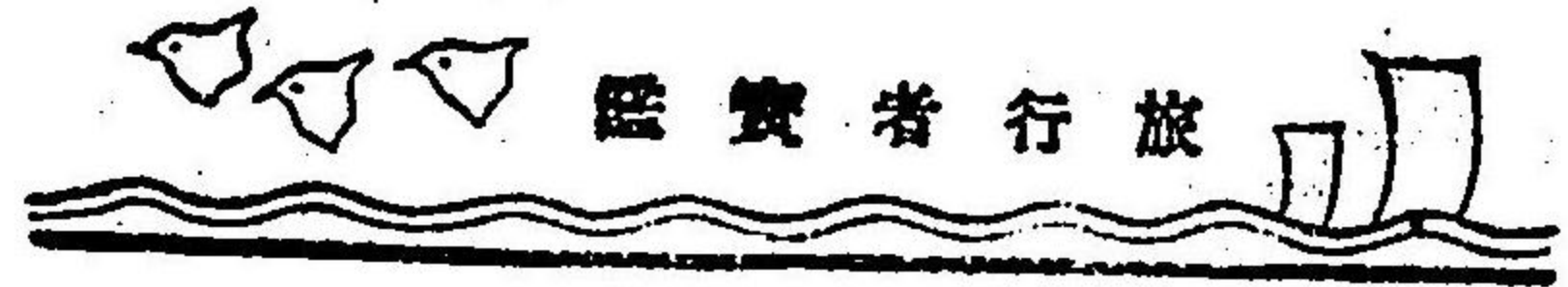


年末の旅行をなす場合は、極めて稀なるもの也。寒を避くる旅行は楽しく、人を避くる旅行は苦しく、金を集むる旅行は面倒臭し、寒を避くる旅行は贅澤に、人を避くる旅行は贅澤の結果に、金を集むる旅行は慾張り、これには、他の各門各項を參酌せしむる外、別に心得方無し。

◎旅行の場合に就ての心得

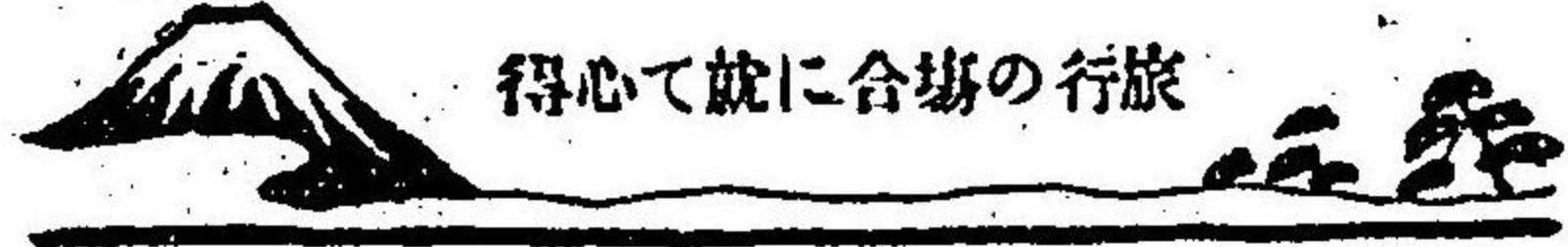
其一 地方の大祭若しくは祝日に當りたる場合

旅行中、豫め期せずして、市邑或は村落の一年一度の大祭、若しくは土地の住民盡く業を休みて遊び楽しむ祝日に出ツくはすことあり、此場合注意すべ



きは、茶店、飲食店、宿屋等には、土地及び近郷近在の若者共の酒に酔ひたるが、多人數断えず出入しつゝあれば、飲食の際是等の者と衝突せぬやうにすること也、又、茶店、飲食店、宿屋等にあらざとも、路傍の家にて酒を飲みつゝある者共が、旅人の通るを見て興ある事に思ひ、酔ひに乗じてバラバラと飛び出し、有無を云はせず引き込みて、盛り潰さんと八方より盃を飛ばすことあり、斯る場合の迷惑は言語に絶す、これに處するの心得無かるべからざる也。

これは、「旅行の土地に就いての心得」の中、「其廿四、氣風の殺伐なる所を旅行する心得」其廿七、奸悪なる人間の多き所を旅行する心得」等を參酌して、怒らず、恐れず、回轉滑脱の底にピクともせぬ膽ツ玉を包める、容易に



食へぬ人間なることを示し、談笑自若として、降りかゝる災難を打拂ふべし、斯る災難に逢はんことを虞れて、最初より戦々兢兢と、祭の賑ひ、山車、飾物等にも碌に目を觸れず、只管路を急いで止まざるは、却つて旅人の特色著るしくして、土地の者の注意を引き、禍ひを招く所以也、宜しく心得あるべし。

其二 蠶業地の養蠶期

蠶業地の養蠶期多忙に見え、且つ局外者の眼に面白く見ゆるは無し、此場合、土地の人間は碌に旅客などに構つて居ず、又、實際構つて居られぬ也、されば、偶然こゝを通りかゝりたる旅客も亦其心得ありて、不自由を忍び、冷遇を憤らぬやうにすべし、なほ一步を進めては、旅客に構つても居られぬ

程に多忙且つ熱心なる、土地の産業の狀態を、細かに觀察研究して、以て得る所あらんとすべく、時宜に依りては、桑を切り、繭を取扱ひて、仕事の手傳ひをなすことを興味となすべし。

其三 漁業地に於ける或る特殊の漁期

北海道の鮭、九十九里の鱒、土佐の鯉と云ふ如く、地方に於ける特殊の漁業あり、旅行の時恰も其漁期に相當せば如何、而して、其漁場に傍うて行くべきときは如何。

濱は非常の賑はひにて、作り損じたる仁王の如き荒男共目も眩めくばかりに激しく活動す、是れ既に奇觀也、此際己れも其中に同化して、歩み乍ら衆と共に大漁を祝し、或は、喜びて暫時引網の綱に手を掛け、生魚を貰ひて却

つて迷惑するなど、面白かるべし、斯くて、具に其狀態を觀察研究せば、實地の興味と共に、得る所頗る多からん、是れ、消極的には、殺伐なる氣風の所を過ぎて安全なるを得る方法にして、積極的には、豫定以外の興味を儲け得る方法也、畢竟するに一舉兩得也。

其四 田植稻刈の時期

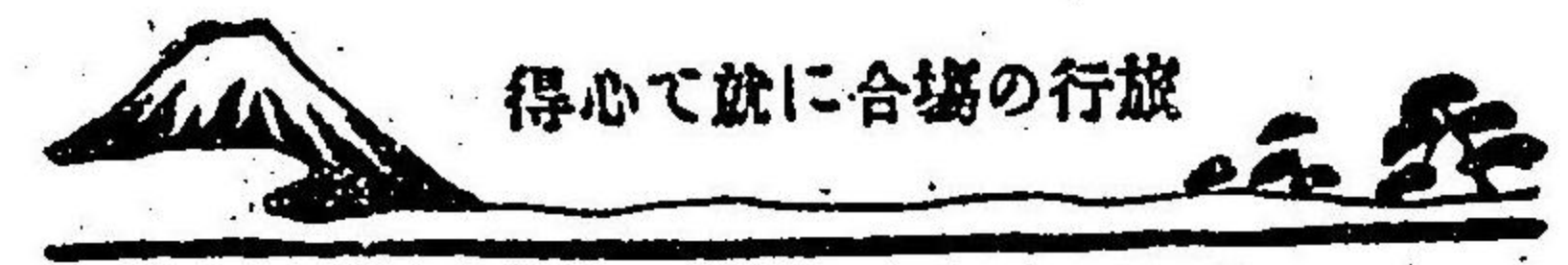
田植と稻刈とは、時期も、爲す事の性質も異なれど、共に田舎の景氣附さて、人々樂しげに働き、歌ふ聲、笑ふ聲、田面に滿つるもの也、されば、是等の場合に田舎を旅行せば、己れも豊饒を祈り豊饒を喜ぶの態を示し、彼等と希望快樂を齊うするの幸福を領すべく、なほ、田植には、白石噺の志賀團七にあらねど、泥の匂ねかゝることもあり、投げやりたる苗の把が過つて我



に觸るゝこともあり勝のものなれば、決して憤らず、冗談にても、米の生る木を投げ着けられたから縁起がいゝぐらゐに云ひて、淺りと打興するを要す、又、稻刈には一しきり往來を稻或は稻を積みたる車にて塞がらるゝ等の事、僻地に行けばよくある例也、斯る場合は、道路の妨害をなせばとて、厳しく咎め、若くは踏み過ぐべからず、町噂に物言ひて取り退けさせ、若くは、一應斷りて後己れ取り退くべし。

其五 早年の旅行

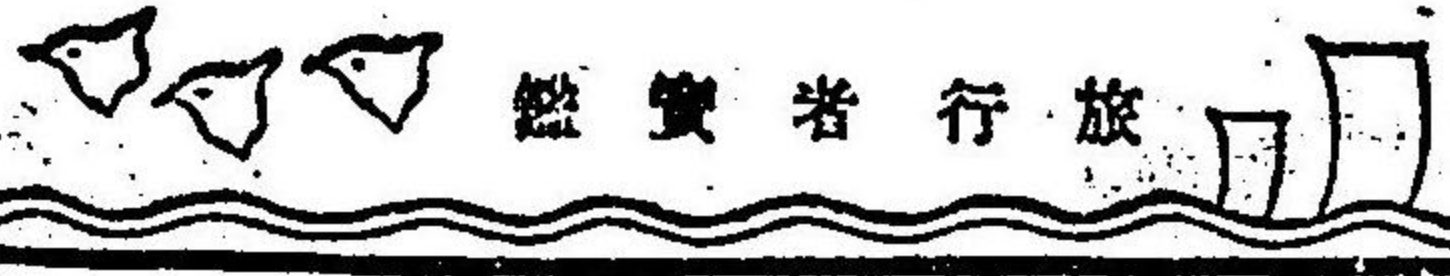
早年と云へば、主として夏の場合也、過ぐる所百姓に同情を表し、其雨乞の爲めに試みたる種々の禁厭祈禱の痕は、敬意を表して之を見るべく、水論水争ひの場所を通りたる時には、其一方の仲間或は廻し者と誤認せられぬや



う注意すべし。

其六 雨年の旅行

雨年には、却つて雨の爲めに百姓が惱まざるゝもの也、田畑の物或は腐り、或は植附出來ず、是等の事を心得て、同情し慰問せざるべからず、何でも雨は好きものと心得、百姓に向つて喜びを述ぶる如きは、迂濶の極也、又、雨年の旅行には、濕氣を受けぬやう、水當りせぬやうの注意肝要也、雨續きに於て、すべて水ある所は深く廣くなり、道路に深き泥濘出來て泥水湧き出るやうに見ゆる時など、旅行に周到なる用心あるべし、殊に、崖の上、崖の下、路などは、忽然路缺け落ち、若くは上より土砂崩壊する虞れあれば、漫然歩みを進むること勿れ。

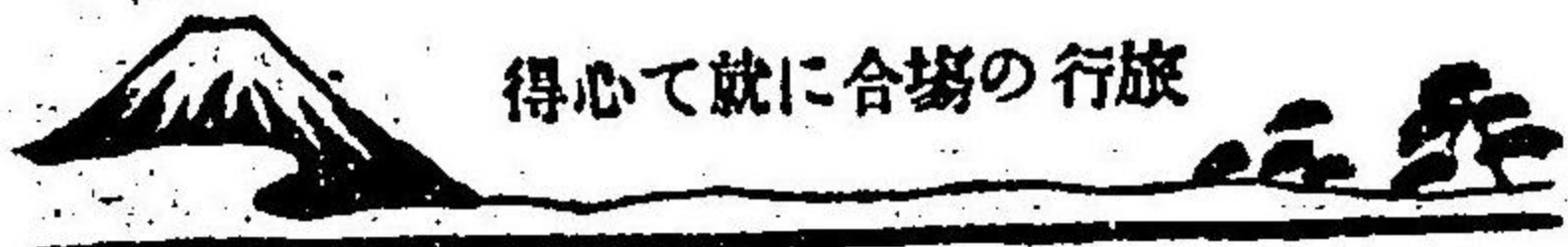


其七 凶作の場合

一地方若くはそれより廣き部分、或は日本全土か、半部かに、凶作の聲を聞きたる場合、其區域内に旅行を試むるには、決して、其旅行より有形的興味を得んとすること勿れ、食物の慾を縱まゝにせんとすること勿れ、飽満して得意なるの色ある勿れ、不測の奇禍に逢ふべし。

其八 豊作の場合

豊作の場合、道路の上、茶店、飲食店、宿屋、遊女屋、芝居、寄席、相撲等、すべて賑ひ榮ふるもの也、旅人も亦好く待遇せらるゝもの也、故に、此際慎重の態度を取つて、人に狎れられず侮られぬを喜ぶが如きこと無く、土地の者の好遇に對して、相當の報酬をなすべく、己れの口と手とにて出來



得べきだけ、土地の賑ひと榮へとを援助すべき也。

其九 地震、洪水、火災、其他種々の變事を経過したる土地を通行する場合

地震、洪水、火災等の現に起りたる場合は、一旅中の變事に就ての心得の條に於て之を述べべく、こゝにては、是等の變事を経過したる土地を通行する時の心得を述ぶるに止めん。

是等の變事を経過したる土地は、外形に於ても、破壊及び不潔の状態を呈して、悲惨の光景懸々たるものあるに、進んで其内情をたゞくに至れば、悲惨の事實更に外形に數倍するを知ることあり、且つ、其變災の性質に依りては、害毒の餘波直ちに收まらずして、或は種々の新なる害毒を伴ひ至ること

無きにあらず、故に、是等の土地を通行するに當りては、左記の條々を心得べき也。

(一) 變災後の窮狀に對する心得、是等の變災を経過したる後は、住民一般に窮狀を呈するを常とす、旅人たる者、宜しく勉めて之を慰問し、彼等が鬻ぐ所の食品其他雜品は、不用ならざる限り、成るべく値切らずして之を買ふべし。

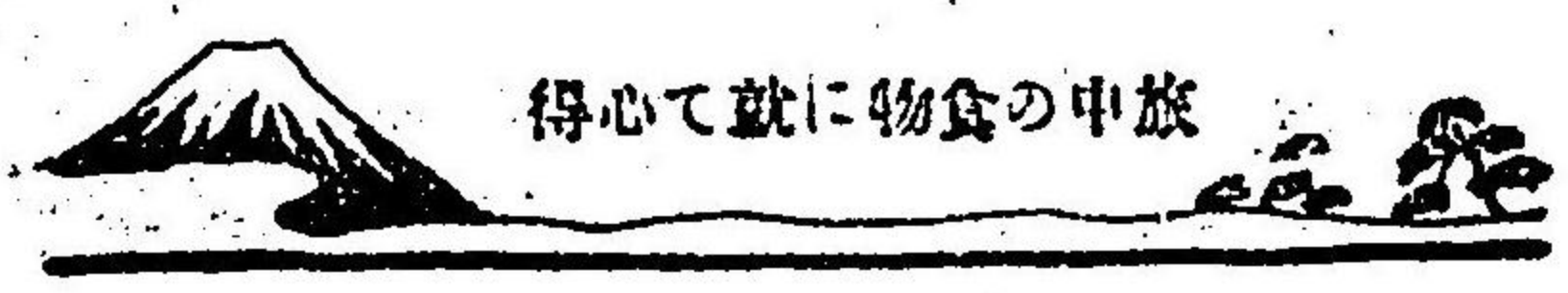
(二) 變災後の病氣に對する心得、變災後は、一般に流行的性質を帶べる病氣に罹り易く、熱病、腸胃病等は其普通也、是れ、洪水の場合には、充分底の底迄汚水に浸染せられたる上、引いて後烈しき日に照らされ、清潔ならざる水を飲みては蒸しに蒸さるゝを以て、非常

に強健ならざる者の外は、皆病ひに犯さるゝと、地震、火災等の後にも、充分雨露日光を防ぐこと能はざる假小屋の如き所に起臥して、不完全なる調理の食物を取るが爲めに、同じく病に犯され易き事情あるとに由れり、故に、旅人は其傳染を受けざるやう、最も食物飲料水に注意すべし。

(三) 變災後の土地に對する心得、變災後の土地は、復舊的人工を加へざる間、異狀を留むるを免れざる也、火災は、旅人に危険を與ふるが如き異狀を後に留むる場合少なしと雖も、なほ漫りに道路以外の燒跡に足を踏み込むべからざる注意を要す、灰に蔽はれたる危險物を踏み抜き、或は、便所の焼け落ちたる跡と知らずして、糞壺の中



に陥ることあれば也、地震の後の土地に對しては、更に多くの注意を拂ふべし、何となれば、足の裏に對する危険物の撒布、火災より甚だしく、加之、大地の陥落、土地の斜面の崩壊、河湖の水の汎濫等、種々の大なる異状を留むれば也、若しそれ洪水後の土地に至りては、其注意すべきの度なほ一段甚だし、汚泥道路に滿ち、或は一様に泥に蔽はれたる中に、土地の陥没したる深き穴あり、今迄の河筋は小石の原となりて、思ひ掛け無き所を河の流るゝあり、瘴氣満々、毒虫其間に出沒す、何の用意無くして行かば、不測の災害あるべし。



◎旅行中の食物に就ての心得

其一 旅中の食物を味ひ別くる心得

地方々に依りて、特産物たる食品あり、たとへば、

- (一) 興津の鯛
- (二) 越前の海膽
- (三) 廣島の鯛
- (四) 京都の松鏡
- (五) 秋田の蕨

等の如し、又、地方々に依りて、其特産物に伴ふ特殊の料理法あり、たと

へば、

- (一) 土佐に於ける、藁火を焚いて、其燃え終りたる所へ、新しき鯉を投じ、暫く暖なる灰の中に置いて後、取出して其なまりたる皮を厚く剥ぎ、中の肉を作り、刺身となす料理法。
- (二) 因幡に於ける、一二寸の小鮎釣に上る晩春の頃、酒と酢味噌とを携へて河邊に行き、釣を垂るゝ人より右の小鮎を買ひては、生きの儘箸に挟みて、酢味噌に潜らせ、ピチ／＼するのを口に運ぶそれ。
- (三) 信濃に於ける、小鳥の肉をたゝいて漬けたる速成の鹽辛。
- (四) 羽後に於ける、暖飯を搗鉢にて搗き潰して、牡丹餅の原料の如きものとなし、之を特に作りたる平ツたき串にタンポ槍の如く圓めて

着け、一通り焼きたる後、庖刀にて之を適宜に切り、別に鶏肉、牛蒡、葱、芹等を吸物の如く煮たるものを作り、その鍋の中に、前の焼きたる物を投げ入れて、煮立たせ乍ら汁と共に椀に盛つて食ふもの。

- (五) 薩摩に於ける豚汁、これは今日何所にも真似て爲す故、珍しからぬやうなれど、薩摩の料理にちがひなき特殊の臭味あり。
- 等の如し、以上は唯だ其一斑を思ひ着く儘並べしのみにて、以上より珍しきもの、奇なるもの、なほ甚だ多き也。
- 斯く、地方々々に於ける特産物たる食品、及び、其特殊の料理法を、仔細に玩味して研究し、縦令又同一の食品同一の料理法にても、地方に依つて幾

分かつ、味を異にするを、舌にて判じ、心にて識り、之より、其人情風俗趣味氣質の特點を見出すことは、旅中に於て頗る重用なる問題也、此點に就て心得無き者は、眞に旅行の趣味を解する者にあらず。

其二 食品の精粗好悪を鑑識すべき事

食物の注意は、平生家居の時に於ても、大切ならざるにあらずと雖も、旅中に於ては殊に大事也、されど、斯く云ふは必ずしも旨き物のみ食ひて不味き物を退けよとの意味にあらず、たゞ。

(甲) 其原料は果して良好にして新鮮なるか。

(乙) 其調理は果して清潔にして忠實なるか。

の二點に、深き注意を取るべしと云ふのみ。

故に、すべて旅中に於て食物を口にせんとする時は。

(一) 原料を鑑識すべし 原料を鑑識するに、一々仔細に開剖し、且つ指にて撚り、掌の上にて潰し、眼鏡にて檢視するやうにては、甚だ厄介なるのみならず、實際出來得べき事にあらず、故に、一見して直ちに、其原料は精良なるか、將た粗悪なるか、新鮮なるか、腐敗に近つきつゝあるか、眞物なるか、擬物なるかを識別し得るやう、平生経験を積み置くを要す。

(二) 調理に注目すべし 原料の鑑識既に了らば、次には其調理の仕方

に注目すべし、土地に依り、若くは其家に依りて、不潔を左迄苦にせぬもあれば、地方の宿屋、別でも晝飯をしたゝむる腰掛茶屋など

にては、すべての物を箸にて打返して、全面に限無く目を渡らすべ
き也、蠅、油虫、其他虫類の死骸、或は其他の異物は附着し居らぬ
か、汁の中に異状は無きか、何所か變色し居らぬか等を、仔細に吟
味すること、是れ潔不潔の問題也、なほ、生煮の部分は無きか、生
焼の所はあらざるか、下地は充分にかゝり居るか、切り方盛り方並
べ方は規率正しきか等を、丁寧に検分すること、是れ忠實不忠實の
問題也。

(三) 食ふべき物と食ふべからざる物

原料の精良新鮮にして、調理の
清潔忠實なるものは、縦令美味ならずとも、喜び且つ安んじて食ふ
べし、それ以上美味ならば頂上也、扱て其次には、原料粗悪にして

新鮮ならずとも、調理の清潔忠實なるを取るべく、原料如何に精良
新鮮なりとも、調理の不潔不忠實なるものは、已むを得ざる場合の
外之を取るべからず、若しそれ、原料も粗悪にして新鮮ならざる上、
調理も亦不潔にして不忠實ならば、如何なる場合にても斷じて之を
取るべからざる也、此際の活路は、唯だ生鶏卵あるのみ、之を其儘
に吸ふか、醬油を割つて飯にかけて食ふかすべしのみ。

其三 旨き物を食ふ時の心得

旅中には、當然旨き物を食ふべき事に極めて居る者多し、是れ大なる間
違ひ也、旅中の食物は大抵まづ、又まづき物は、大抵安全にして、旨き物に
如何はしき誤魔化し物多きを記憶するを要す、是れ過ち無きの道にして、且

旅行の趣味を深からしむる所以也、若し、たまく旨くして且つ安全なる食物に逢はじ、之に對する珍重の念、之を味ふる怡悦の情、興趣蓋し云ふべからざるものあらん。

今、旅中の食物に等級を與ふれば。

- (一) 旨くして安全なる物
 - (二) 不味くして安全なる物
 - (三) 旨くして不安全なる物
 - (四) 不味くして不安全なる物
- 等となるべし、而して、(三)と(四)とは最も多く、(二)は多からず少なからず、(一)は極めて少なし。

其四 不味き物を食ふ時の心得

旅中にて、食物の旨さ不味さを大問題とするは、旅行の趣味を解せざる者也。況んや、これは東京風でオツだと嗜み、それは大坂流でようおますと吐すに於てをや、此輩の頭腦の乾燥なること大鋸屑を詰めたる糞の如く、此輩の胸腹の俗悪なること御齒黒濁に似たりと云ふべし。

旅中に於ての食物は、原料の精良粗悪と新鮮不新鮮、調理の潔不潔と忠實不忠實とを論ずべし、旨い不味い、口に適する適せぬは、やかましく云ふべき問題にあらで、却つて、之に依つて、地方々々の人情風俗趣味氣質を研究すべし、重要な材料なる也、研究の材料は獨り旨い物にのみあらずして、亦不味い物にもあり、旨い物もあり、不味い物もありて、始めて比較研究は

出来る也、旨い物を食は、たゞ旨いと云つて喜ばずに、どんな風に旨いかを味ふべく、不味い物を食は、唯だ不味いと云つて排斥せず、どんな具合に不味いかを研究するを樂むべし、旨い不味い共に好き也、而も、研究の材料は多くの場合に於て旨き物より不味き物に含まるゝ也。
不味き物を食ふ時、其旨い不味いの差別を忘れて、たゞこれに興味を感じずるには。

- (一) 餘りに鹹くして不味くば、土地の住民が一般に鹹き物を好むを知りて何故に爾るかを探究する事。
- (二) 餘りに水臭くして不味くば、土地の人間が一般に水臭き物を好むを知りて、何故に爾るかを探究する事。

- (三) 一種の臭氣ありて不味くば、土地の住民が一般に其臭氣を嗜むを知りて、何故に爾るかを探究する事。
 - (四) 一種の刺戟性ありて不味くば、土地の住民が一般に其刺戟性を嗜むを知りて、何故に爾るかを探究する事。
- 其他かゝる種類の題目は數多かるべし、これを探究するには、住民の人情風俗より其調理の歴史等、種々の方面より窺ふべしとなす。
- 要するに、腰掛茶屋にて食ふ芋の煮物を二つに割つても、其中に土地の特色を窺ひ得べく、路傍の怪しき小屋に並べられたる梨子、柿の類を嚙んで見ても、其汁の中に土地の特點を味ふるに足るべき也。

其五 有毒有害なる物を食ひたる時の心得

旅中にて、思ひ掛け無く有毒なる物、有害なる物を食ふことあり、勿論、有毒の疑ひある物、有害の虞れある物は、たとへば傍にて平氣に之を食ふ者を見る時も、決して口にすべからざること、苟も旅行の何物なるを解する者にして知らざる筈は無ければ、こゝにては、唯だ、有毒物有害物を口より腹に送つて仕舞たる時の心得のみを述べることとせん。

- (甲) 有毒物とは、人體を損害すべき固有の毒素を含める物。
- (乙) 有害物とは、固有の毒素を含むにあらずして、唯だ、不消化なるか、刺戟性强さか、酸酵性强さかの爲め、其一時の身體の狀態に對し不利なる物。

土地に依りては、或る毒素を含める物なれども、先祖代々之を食ひ來つて毒に中りたる者無きを以て、平然として之を旅客に侷め、旅客亦其説明を聞いて安心して食ふことあり、されど、土地の人の體中には、久しき年代の遺傳として、其毒に對するだけの抵抗力あるが爲めに、特に中毒を免るゝものなるやも知らざれば、旅客漫に之に倣ふこと能はざる也、慎むべし。

- (一) 先づ急に一椀の鹽水を吞むべし。
- (二) 吞み了らば、直ちに咽喉に指を突込みて、腹中の物を吐き出たすべし、毫も疑議すべからず。
- (三) 吐き了らば、水を以て口を洗ひ、爾る後苦味丁幾を水にて服すべし。

し、左も無くば、重那、硝着、格末の合劑を、やゝ多量に服して水を呑むべし。

(四)それにてなほ氣分悪しくば、醫師の治療を受くべし、此場合には、宿屋若しくは腰掛茶屋より、爾るべき人間を案内に立たしめて、自身醫師の許に至り、先づ案内者をして一通り申込ましむるが好し。

◎旅中の宿泊に就ての心得

其一 宿屋を選ぶ心得

宿屋を選ぶに毫も苦まざる場合あり。

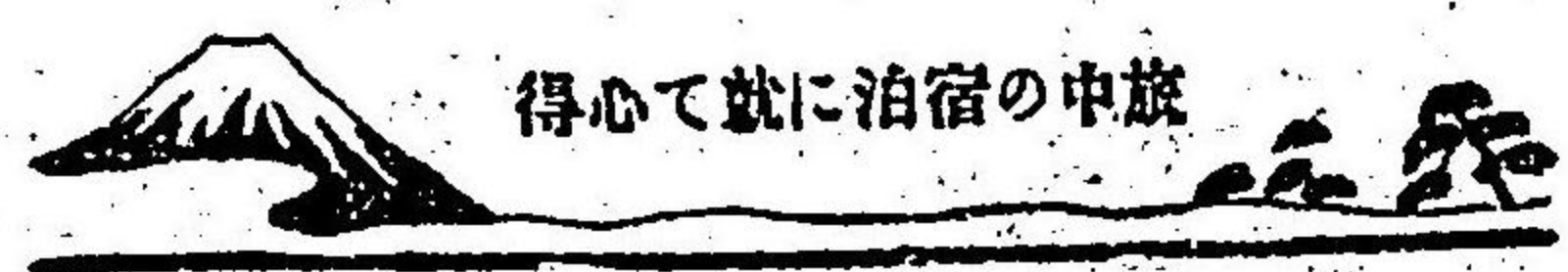
(一)宿屋に向つて紹介書のある場合。

(二)何地の何屋と音に聞こえたる宿屋を目ざして行く場合。

(三)特に何地の何屋が好しと、之に宿泊せし経験ある知己友人より聞きたる場合。

(四)平生愛讀する新聞雑誌に掲げられし、土地紹介の旅行記に、何地の何屋が好しとありたるを記憶せる場合。

等是れ也、されど、紹介書も無く、経験ある友人知己よりも聞かず、新聞雑誌に土地紹介の旅行記も掲げられず、何地の何屋と音に聞こえたる宿屋も無き所にて、單に己れのみと耳とのみに依り、宿屋を選ばざるべからざる時は、大に其心得あり、并は、己れの氣に入りたる、若くは風致に富みたる等に拘泥せずして、其驛中にて最も家作の立派なる、且つ賑やかなる宿屋を選



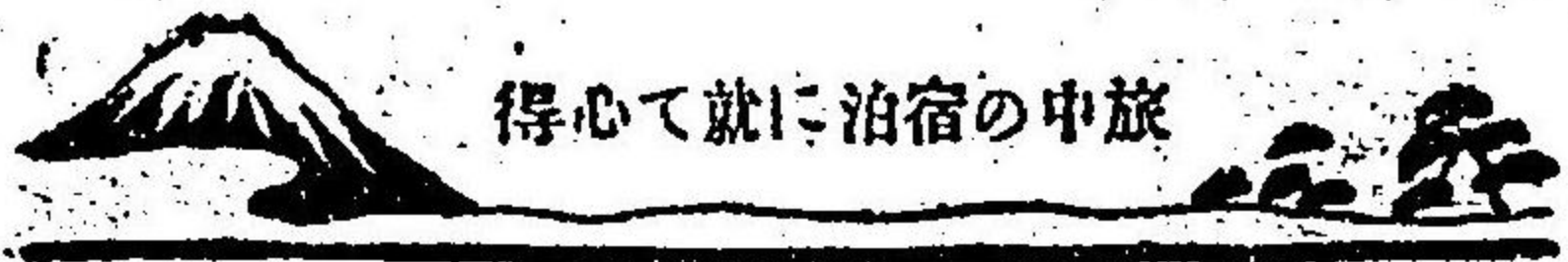


ぶを好しとす、待遇際立つて叮嚀ならず、價ひや、高くとも、間違ひなきだけ得なりと思ふべし。

其二 上等の宿屋、及び中等下等最下等の宿屋に着きたる時の各別の心得

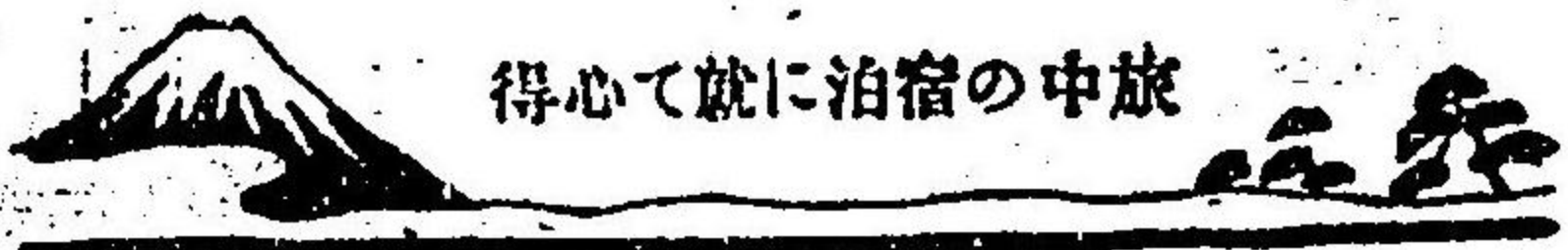
宿屋に着きたる時、其差等に随つて之に對する心得あり、何れの宿屋に對するも同一の態度を取るは愚昧也。

(一)宿屋の差等を判別すべし 己れの泊るべく定めたる宿屋は、上等なるか、中等なるか、下等なるか、最下等なるかを判別するの必要あり、又、外観左迄立派ならずとも、内容頗る上等なるあり、客を



呼び込む時馬鹿に叮嚀にて、内に入りてよりそれ程で無きあり、初めは素氣ないやうにて、座敷に通つてより、案外に親切なるあり、故に、之を判別するには、相當の経験と、経験ある多くの人の所説を取捨選擇するの頭腦と、物の皮相以下に透徹するの眼識とを要する也。

(二)宿屋の差等と其實質 上等の宿屋とは、家作、室内の裝飾、器具、寢具、食物、食器等すべて、精良美麗にして且つ清潔なるを云ふ、中等、下等、最下等の階級も、之を標準として分別すべし、但し、待遇の態篤と冷淡とに對する心得は、自ら別問題に屬すれば、項を改めて之を説かざるべからず。



(三) 上等の宿屋に着きたる時の心得 大家へ客に行きたるが如く、固

くなりて窮屈に構へること宜しからず、さればとて、輕蔑せられま
じと無暗に威張るは、更に見苦しさもの也、如何に善盡し美盡し、
耳目口鼻皆驚くべく上等にても、之に宿かるべき機會に遭遇したる
以上は、虚心平氣にして、我家の室に居り、我家の僕婢を役する
が如く、如何にも尋常に、如何にも寛きたる態あるべし、尤も、こ
れは中流及び中流以下の人に對するの注意也、それ以上の人には、
注意するの限りにあらず。

(四) 中等の宿屋に着きたる時の心得 上等の宿屋に對するよりも、更

に一層威張らぬやうに注意すべし、我が家ではモット上等の生活を
して居ると云はぬばかりに振舞うて、虚勢を張らんとすること、殊
に宜しからず、其家と同化して、自然に反りの合ふやう、己れ自ら
外形内容共に適宜なる中等の人となるを要す。

(五) 下等の宿屋に着きたる時の心得 これも漫りに汚ながら、不味

りて、顔を盛むべからず、又、強めて己れも下等になりて反りを合
はするに及ばず、唯だ、上等下等の差別を忘れて、其中より何か一
つの趣味を見出だし、それに打興じて其他を顧みざるべし。

(六) 最下等の宿屋に着きたる時の心得 最下等の宿屋とは、木賃宿に

少し毛が生えたる程のものにて、淋しさ土地にもあれど、重に般か
なる土地の一端に見出ださるゝもの也、中流の人ならば、どうかし

て旅中に金が無くなりたる時か、左も無くば、特別に泊り客が立て
込みて、一驛の宿屋盡く塞がりたる場合か、又は、極めて稀に、酔
興にて泊つて見る場合かの外に、かゝる宿屋と交渉すること無かる
べし、此場合は、己れも一時最下等の人間となりて調子を合はする
こと、却つて宜しからず、宿屋に取りては侮辱せられたる感あるべ
ければ也、唯だ、寛大の人となりて、其不如意を忍び、其不都合不
體裁を恕するの雅量を示すにて足れり。
以上はすべて中流の人としての心得なるが、中に、宿屋と反を合はすこと
を説きたるは、決して宿屋の機嫌を取れとの意味にあらず、宿屋の機嫌を取
るなど、そんな馬鹿々々しき事があるものにあらず（客として、宿屋の女中

の機嫌を取る者も無さにあらざれど、そは論外也、たゞ、自己の便宜と安樂
との爲にするの程度に於て對宿屋策を講じ、相互ひに誤解し、抵觸し、衝突
して、詰らぬ不愉快と損失とを買はぬやう、調和するを要すと云ふのみ。

其三 親切なる宿屋に對する心得

宿屋に依りては、形式的にあらず、心底より親切に客を遇する家あり、時
代は漸次にかゝる宿屋を少くし、尙ほ今後益々其傾き甚だしかるべきが、各
地を旅行せば、稀に之に逢ふの幸福無さにあらざるべし。

親切なる宿屋に對しては、其親切に乗じて我儘勝手を働さ、又其親切を利
用して宿屋に迷惑を掛くる等の事無さやう注意すべし、一人迷惑を掛くる者
ありて、其宿屋に警戒の念を起さしむれば、其後に至る客は、知らずくの

間に多少の損失を蒙るべし、是れ實に公德問題也。

又、親切なる宿屋に對する態度として、平生謹嚴なる人ならば、我家に在るが如く充分に寛ぐも好しと雖も、それ以外の人にては、餘りに明けツ放しに過ぐる時は、却つて宿屋に迷惑を感ぜしめ、其反響として、缺點ある待遇を受くることあり、故に、心易き親戚の家に客となりたるが如く、寛き安んじて我が家に在ると齊しさが中にも、多少禮儀を守り體面を重んずる所あるを要する也。

其四 冷淡なる宿屋に對する心得

冷淡なる宿屋は

(甲) 元來何人に對しても冷淡なる。

(乙) 一時其家に非常の不幸至り、若くは驚慌起りて、客を顧ること能はざるが爲めに冷淡なる。

(丙) 或る一人若しくは一組の客に對してのみ冷淡なる。
の三類に別つべし。

甲の場合、已むを得ず一時の廻り合せ惡しと諦め、成るべく己れの手にて己れの事を處理し、宿屋の待遇に對しては、唯だ批評的態度を以て、高き所より之を見下すの雅量あるべし、但し、其不都合なる點を數字的に記憶し、出發に臨み勘定を済ましてより、改めて亭主を呼び、今後の爲め穩かに警告を與ふるを可とす。

乙の場合は、只管に忍びて不平の色あるべからず、寧ろ其家に同情して慰

問の辭を與ふべし。

丙の場合、宿屋の冷淡を憤慨するに先だちて、己れに顧み、特に冷淡なる待遇を受くべき缺點ありや無しやと點檢すべし、斯くて、缺點あるを認めたる時には、改むべきは直ちに改め、改め得ざるは得ざる理由を説明して、宥恕を求むべし、それにてなほ冷遇する時は、主人を呼びて詰問すべきのみ、宿屋が特に一人或は一組の客を冷遇するは、大抵客の缺點に依り、左も無ければ双方の誤解の爲也。

其五 木賃宿に泊りたる時の心得

これは平生木賃宿のみに泊る乞食的旅人の爲めに説くの心得にあらず、普通の宿屋に泊るべき人が、一時都合悪しく、若くは窮迫に陥つて、已むを得

ず之に依る時の心得也。

(一) 不潔非衛生は勿論顧ること能はずと雖も、さればと云うて棄鉢は宜しからず、不潔非衛生は不潔非衛生として注意し、逃れられぬ範圍の中にも成るべく逃るゝ心掛あるを要す、かかる場合には講ずべき方法無し、たゞ、精神を鼓舞して不潔非衛生に對抗すべきのみ。

(二) 木賃宿は、概して客より主の方が威張るものなれば、これを怪しと思はず、其風に従つて、主に向ひ敬意を表するくらゐに加減すべし、すべて、命ずる態度に出でず、頼む態度を取るべし。

(三) 木賃宿は、乞食的臭味を帯べる雑客一室内に詰め込まれるを常とすれば(中には別室と云ふもあれど)、是等の合客に對し、傲慢或は冷

淡の態度無く、又、是等の者の中には、不潔、野卑、喧騒、厭ふべきありと雖も、決して之を色に表はさず、すべて尋常に、アツサリと應接すべし。

(四)木賃宿に泊りては、金銭物品の處置に就いて、他人の注目を受けぬやうにすべし、金有るやうに見せかくるも不可、金無きやうに見せかくるも不可、金を重んずるやうに示すも宜しからず、金を輕んずるやうに示すも宜しからず、必要の額だけを物靜かに支出して、其他は、人間世界に金銭てふものあることを忘れたるが如く構へ込むべし。

其六 野宿したる時の心得

野宿に二様の場合あり。

(甲)人煙無き所に旅行して、宿かるべき所無きが故になす野宿。

(乙)宿屋に泊るべき金銭無くして、已むを得ずなす野宿。

是れ也、されど何れにしても野宿の仕方は一つなる也。

(一)成るべく、林間の神社、辻堂、母屋と遠く離れたる百姓の物置小屋等に入り、雨露を凌ぐを好しとす、但し、乞食と見誤まるゝは、好けれど、盜賊と見誤まられざるやう、注意すべし。

(二)右の如く雨露を凌ぐべき所を得ずば、橋の上にて、欄干に背を持たせ、膝を抱いて睡るを最上とす、左なくば、大地の乾きたる平面上に臥て叢に離れたる所が好し、冬枯の時の外は、柔かにても草の上に臥

すべからず、又大木の下に倚るも宜しからず、夏は殊に慎むべし。
(三)河岸ならば、引き上げられたる空船に入るべく、海岸近くは、路より下りて、砂原に身を横たふべし。

(四)夏の夜道には、葭簾張りの茶店の空なるを見出して、其屋根に上り身を横たふる程、氣持好くして且つ安全なるは無し、但し、此場合葭簾を毀さぬやうにするが徳義也。

(五)野宿には、犬に見附られぬやう注意し、其大丈夫なるを見てより臥すべし所に落着くべし、若し、犬に見附けられて吠る立てられたる時は、物静に立ちて、早速其所を去るべし。

(六)すべて、野宿をするには、氣を落着け、膽ツ玉を据ゑ、乾坤至る所

宿屋ならぬ家に宿かる場合左の如し。
(一)宿屋無き僻地にて日の暮れたる場合。
(二)急病若くは怪我等にて、宿屋無き地に宿を求めざるを得ざる場合。
(三)旅費を失ひて、已むを得ず恩惠的に宿を乞ふ場合。
以上の三つの場合に於ては、其何れにしても、土地の者に聞きて、慈善の名ある大百姓、音に聞えたる、大寺院等の所在、其内容の概畧を知り、趣きて

皆我が家てふ意氣を以て、之を樂み、之を興味とするの悟りあるべし。

其七 百姓家若しくは寺院、其他宿屋ならぬ所に宿借りたる時の心得

殷懃に其名を賛し其徳を頌し、宿を乞ふに至りたるの事情を述べし、
又、かゝる大百姓大寺院無き土地ならば、己れの目にて然るべき家を選び、
談じ込むべし、此際いさゝかも作り飾り無く、全心全力を擧げて其懐に投ず
べきのみ。

而して、宿屋ならぬ所に泊り込みたる上は。

(一)成るべく其家に手敷を掛けぬやうにすべし。

(二)成るべく面白く四方山の話すべし。

(三)成るべく夜中に便所に起きぬやうにすべし、されど、寢床に就く時
は必ず便所の道を明かにし、且つ、提灯、蠟燭、燐寸の類を乞ひ置
くを要す。

(四)翌朝町噺に禮を云ひたる後、金あらば寸志として紙に包み、若くは
所持の品を禮の心に差出し、金も品も無くば、真に心の底より感謝
の意を述べるに止むべし。

等の心得を忘るべからず。

其八 山奥に泊りたる時の心得

宿屋と宿屋ならぬ所との別無く、すべて山奥の家に泊りたらば、土地の方
角、山谷の形勢等より、其家の向、戸締り、雪隠、家人の性質、其生活の
態など、篤と見窮むべし、若し不審の點を認め、又何と無く不安なりと
決して之を色に出だすべからず、表面は左も無き躰にて、内心油断無
す。

其九 崖の上、若しくは崖の下の家泊りたる時の心得 若し
 長雨の後、雪解の頃、其他何かの爲に、突然崖崩れのことあり
 山中河岸などの、崖の上、若しくは崖の下の家には、如何なる場合に
 らぬやうに注意すべし、されど、已むを得ずして泊りたる時には、表
 口、雨戸、窓等の案内を明かにし、荷物携帶品は、何時にても提げらる
 う、一纏にして枕許に置き、旅装を少しく寛けたる儘にて寢床に就き、
 と云はゞ飛び出すやうにすべし。

其十 野中の一軒家に泊りたる時の心得
 これには、山奥に泊りたる時の心得を參酌すべし、又、朝暗さ中に出發し、
 若しくは夜中に出發する時の用意に、東西南北の道の案内、本道枝道及び間道

の關係等を、宵の中に明かにし置くべし、野中には縦横に路筋多きもの也。

其十一 海岸に泊りたる時の心得

海を背に往來に向ひたる家は、泊り心地好さうに見えて其實好からず、
 往來を隔て、海に向ひたる家を選ぶべし、すべてに於て利多きもの也、若し、
 海を背にしたる家の外無くば、二階にても三階にても、成るべく高き位置の
 座敷を選ぶを可とす、なほ、海の風の直接に入る座敷は、暑き時には夜明け
 て寢ても、身體の毒にならぬもの也。

其十二 河邊に泊りたる時の心得

其岸が崖になり居る所ならば、崖の上に泊りたる時の心得を參酌すべく、
 水に近き家に泊りたらば、出水の虞無きや否やに注意すべく、座敷は成るべ

く入口の往來に近きを選ぶべし。

其十三 湖畔に泊りたる時の心得

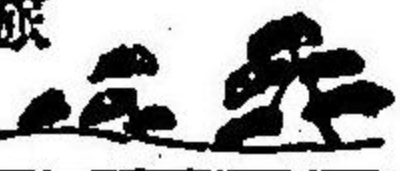
湖畔には瘴毒の氣あることあり、左無くとも、濕氣多くして疊や敷物の障り心地悪しきもの也、毒ある蚊、其他毒を含める虫の多き所あり、注意して是等に觸るべからず。

其十四 淋しき村に泊りたる時の心得

これは「旅行の土地に就ての心得」の「其一」、及び此章の「其八」「其九」を參酌して、然るべき心得方を定むべし。

其十五 賑かなる町に泊りたる時の心得

宿屋の一室に在りとして、安心して氣を許すべからず、掏摸、盜賊等の包圍



中に在るものと思ふべし、大切なる物は帳場に預け、下駄、傘等の處置も嚴重にし、又、成るべく己れの事は己れ處置して、人に頼まぬやうにすれば間違ひ少なし。

其十六 宿屋に着いて直ぐに聞くべき事

左の件々は、如何なる宿屋に着いても、直ぐに聞き定むべし。

(一) 東西南北の方角

(二) 雪隠の場所

(三) 裏表の口

◎旅中人と交渉する心得

其一 道中近附となりたる人に對する心得
道中人と近附になる場合は

- (一) 道連となりたる。
 - (二) 瀛車、電車、乗合馬車、駄馬、荒神(馬の鞍の兩側に、火燧を倒さ
にしたるが如き物を着けて、一人づゝ鞍を隔て、之に乗る)等にて
近附となりたる。
 - (三) 腰掛茶屋にて心易くなりたる。
 - (四) 合宿したる。
- 等なるが、以上の人々に對する心得は左の如し。
- (一) 洒落に豪放にすべし、淡泊に胸襟を披くべし、心易く談笑すべし、

されど、或點迄に止めて、それ以上は嚴しく引締め、毫厘も許す所
あるべからず。

- (二) 道中近附となりたる者が、これは何の妙薬など、稱して進むとも、
體好く斷るべし、それが、世間に廣く行はるゝ賣薬にても、決して
心を許すべからず。
- (三) 若し、先方が物を買うて我に與へたらば、我も亦、多く時を移さ
る中に、それと同價格以上の物を買うて返禮すべし、兩人にて物を
食ひたる時は、必ず勘定を半々にすべし。
- (四) 成るべくは、道中にて近附となりたる人と、二日以上一緒に旅行す
べからず。

其二 車夫馬士に對する心得
道中の車夫又は馬士に對しては、面に掃まりありて而も優しく、言葉に力ありて而も圓くすべく、應對談判は、テキハキと小口より切つて行くやうに極めるべし、極めたる事は、小口より着々實行して手を詰め、毫厘の間隙無からしむべく、これ、間違ひを防ぐ法也。

其三 腰掛茶屋の主及び女中等に對する心得

途中腰掛茶屋に休みたる時、其主或は女中が、特に何物か何事かを勤めたらば、其裏面の事情を探らずして、迂濶に之に應ずべからず、又、旅中の要事、土地の状態等は、女中及び其他の者に問はずして、必ず主に問ふべし、但し、腰掛茶屋に於ては、女中などを相手に、随分冗談を云ひ悪巫山戯をす

るも、多くの場合に於て妨げ無し、高が半時間か一時間の交渉に過ぎざれば也。
其四 宿屋の主、番頭、其他雇男及び女中等に對する心得
宿屋は、主若しくは惣支配をなす番頭と、直接交渉なして、諸事を定むるを好しとす、自分の座敷を擔當する女中が定まれりとして、何事も其手を経るは、靴を隔て、痒さを搔くが如き場合もあるべし（尋常の些事は勿論女中に任せにても好けれど）、若し、主人番頭以外、雇ひ男が來つて命を聞くことあらば、其顔を見覺ゆると共に、必ず其名を聞き置くべし、宿料の受取證は無論求めずとも出すものなれども所に依り家に依りては、茶代の受取を出さぬことあり、是れ或は、女中、雇ひ男等が横取する場合もあるなるべし、故

に、此場合には受取を出すことを命ずるが好し。

其五 按摩、藝人、及び、宿屋に來る商人、貸本屋等に對する心得

宿屋に居る所へ、按摩、淨瑠璃語り其他の藝人、土地の名物などを嚮ぐ商人、貸本屋等が、御用は御座いませんかと、やつて來ることあり、これに對して、それくの心得方あり。

(一)按摩 は、嫌ひにあらざれば呼び入れて揉ませずべし、揉ませ乍ら、土地に關する種々の事を問ふべし、是等の者の云ふ所、盡く信ずべからずと雖も、己れに判斷力あらば、取捨の選擇に苦まざるべし也。

(二)淨瑠璃語り其他の藝人 これも、己れに差支へなくば、アツサリ

と語らするか歌はするかすべし、尤も、藝の方はいゝ加減にして、土地の話を聞くことを主とすべし也。

(三)按摩、藝人に就いて、最初、聞くべき事 是等の者と言葉を交ふ

る最初には、土地の者なるか、他より來りて土地に住み馴れたる者なるか、或は近頃他より來りたる者なるか等を聞き定むるを要す、土地不案内の者が知つた振りに話すと、土地に悪感を懷く者が讒訴的に話すとは、人を誤り易きものなれば也。

(四)商人 土地の名物などを嚮ぐ商人は、時として、如何はしき物を高く賣り附くことあり、又、欲しさうなる物を目の前に陳列して

巧みに説き、懐都合を忘れて買はんとせしむるもの也、ツカと乘らぬやう注意すべし。

(五) 貸本屋 これも話相手に好し。

其六 旅中すべて特別の待遇を與へられたる時の心得

道中にて知合となりたる者にて、車夫馬士にても、腰掛茶屋の主及び女中にて、宿屋の主及び女中にて、按摩、淨瑠璃語り其他の藝人にても、商人にても、貸本屋にても、すべて、旅中にて交渉する人が、己れに對して特に優渥なる待遇をなす時は、先づ心を平かにして、其何故に特に我を優遇するかを考察すべし、斯くて正當の理由を發見すれば則ち可也、若し理由無きときは、必ず我に求むる所あるか、將た我を欺かんとするかを知りて、充

分に警戒すべし。

其七 旅中買物を頼み、其他人に手数を掛くる時の心得

宿屋に或る買物を頼む時は、どうせ一二割高く買ふ覺悟にて、後に苦情を云ふべからず、又、使ひに行きたる者に對しては、此方にて相當と認むる報酬を與へて宜しきや、或は、勘定書に附け加へて、向ふより請求あるべきやを、必ず主若くは番頭に問ふべし、右にあらで、漫りに報酬と名づけて使者へ傳達を頼み、又は直接手渡しするも、此事帳場へ通り居らずして、二重に取らるゝことあり、注意すべし、買ひ物にあらずとも、何か特に手数を掛けたる時は、此心得に據るべし。

◎旅中の病氣に就ての心得

其一 食傷及び水中りに就いての心得

食物及び水の相違に随つて旅中動もすれば胃腸を損ず、左れば、旅中は成るべく生水を飲まず、食物も、平生口に馴れたると餘り甚だしく異なる物は成るべく之を取らざるを好しとす、斯く注意しても、稀に飲食の爲に病を生ずることあるときは、其未だ甚だしからぬ中に、得べくんば、悪くなりさうな兆候ありて未だ悪くならぬ中に、豫て用意の重那、硝蒼、格末の合劑を服し、若くは苦味丁幾を水に滴らして用ふべし、それにて大抵癒るもの也、されど、それにて利目無き時は、土地の醫者の療治を受くべし、それも、堪へ

得ざる時の外は、自身醫師の許に赴きて療治を求むるを好しとす、又、醫師無き僻地にて、どうしてもやり切れぬ時には、重那、硝蒼、格末の合劑を比較的少量に用ひたる上、鹽を炒りて紙に包みたるを腹部に當て、左なくば、熱き風呂に入りて、逆上する程に温まるべし、百草の類は好けれど、其他功能書の仰々しき賣藥を、彼の此のと矢鱈に用ふるは宜しからず。

其二 足痛に就ての心得

旅行には、足が一番に大事也、徒歩の旅行は云ふ迄も無く、車、馬等に依る時にても、足が悪くて旅行は出来ぬもの也、されば先づ

- (一) 草鞋の穿せやう
- (二) 足の運びやう

(三)途中の休みやう

(四)草臥の抜きやう

などを心得たる上に於て、旅行を始むべきが、それにて足痛を生じたる時は、左に述べたる所に依りて、早速手當をなすべし。

(一)草臥れて足痛する時は、宿に着き風呂に入りて後、鹽を求めてシタ、カ足の裏へ擦り着けたる上、火の上にかざして烘るべし、癒ると妙也。

(二)或は、風呂に入りて後、焼酎を足の三里より下足の裏迄吹き附くべし、手にて塗りては利かぬもの也。

(三)足の土踏まず腫れ痛むには、蚯蚓を(中に含みたる泥の儘)磨り潰

して塗るべし。

(四)足の裏へ豆を踏み出したる時は、半夏の細末を即飯糊に押混せて塗りて好し、半夏は何所の薬種屋にもあり。

(五)又は、煙草の吸殻を即飯に押混せて附けたる上を、火に烘るべし。

(六)或は、木綿糸へ針を通し、其糸へ墨を澤山塗りて、豆を横に突き抜けば、水出て、墨は豆の中に残り、痛み止ること妙也。

(七)其外、餛飩の粉を水にて解き、塗りても好し。

(八)夏の旅に足の裏熱し痛む時は、蓼の葉を搾りて其青汁を塗るべし。

但し、以上は手軽く出来る方法のみ也、如何に妙方にて、珍らしき原料を用ひ、甚だしく手数掛る事にては、旅中役に立ぬものと知るべし。

其三 旅中にて怪我したる時の心得
小さな疵ならば、寶丹膏を用ひて大抵功を奏すべし、切り疵にても、躓き倒れて磨り剝きたるにても、足の裏にトゲを刺したるにても、すべてこれにて好し。

大なる疵ならば、餘り多く血を出さぬ中に（寧ろ一滴の血も漏らさぬ中）、緊しく局部を縛り着けて、扉（擔架あらば極めて結構）か何かに乗り、近き醫師の許に趣くべし、若し動脈を切断したらば、切口に五十錢銀貨か二錢銅貨かを強く押當て、其上を緊しく縛り着くべし、其疵のあるところ若し手足ならば、手拭にて縛るべく、胸或は頭部ならば、手拭を疊んで押當てたる上を、帯か襖鼻褌かにて緊しく縛り着け、然る後醫師に送らしむべし。

其四 毒虫に害せられたる時の心得
草原、沼澤の傍等にて、毒虫に刺され、噛み或は痛みを覺えたる時は、速かに寶丹膏を塗るべし、若し蝮に咬まれたらば、直ちに局部に口を當て、血を吮ひたる上、寶丹膏を磨り込むべし、口の届かぬ所ならば、指先に疵口を挟みて、痛くとも我慢して極力其血を搾り出して後、寶丹膏を磨り込むを好しとす、なほ、重態ならば斯くして後醫師の許に趣くべし。

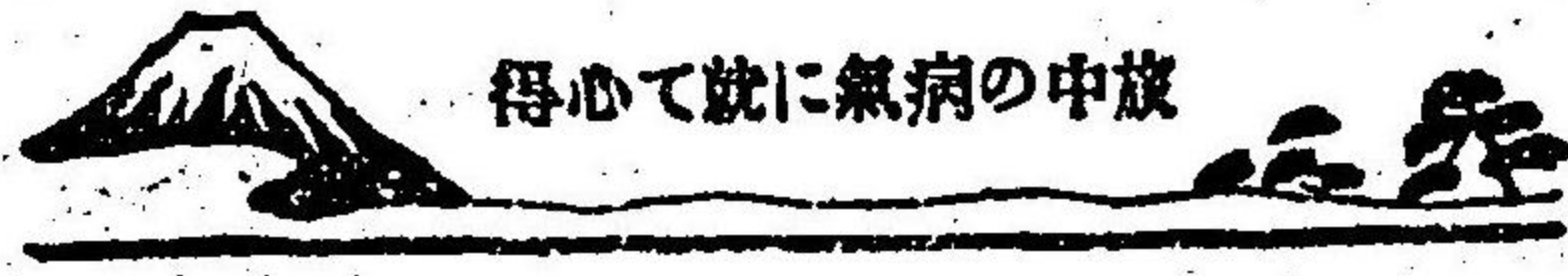
其五 流行病に感染したる時の心得
赤痢、虎列拉、腸窒扶斯、流行感冒、麻拉利亞熱、黒死病などの流行區域には、成るべく旅行せぬを好しとす、又、已むを得ずして旅行する時には、之に感染せぬやう注意するを要す、されど、既に感染したる上は是非も無し



若し其人非常の氣力を有して、何物にも勝ち得べしとの自信あらば、重那、
硝着、格末の合劑を多量に服して、一時下痢を防ぐやう肛門に栓し、熱き風
呂に我慢して長く入り、飛び出してより腹に暖く物を捲き着け、ブランドー
などの強き酒を薬用し、それにて病を壓倒して仕舞ふも好けれど、それは非
常の賭博的行爲也、十に九迄もそれに依るべからず、速かに尋常に名乗出て
、相當の設備ある病院に投じ治療を受くるを好しとす、躊躇して手後れとな
らしむる勿れ。

其六 持病起りたる時の心得

平生持病のある者は、其手當法を心得、且つ之に適する藥物の用意あるべ
き筈也、旅中は殊に其準備を整頓せしめ、周到緻密なるを要す、家居の時と



は異り、病ひ起りて後は困難なるものなれば、經驗に依りて、病ひ將に起ら
んとする徴候ある時を見計らひ、速かに豫防的の手續をなすべし。

其七 風邪に罹りたる時の心得

これは別にむづかしき事無し、アンチピリンにても、アンチヘブリンにて
も、其場合求むるに便宜なるものを取りて用ふべし、但し、病を推してコヂ
らすること無く、少し悪き時に薬を用ひて、早速平癒せしむるを要す、旅中
の病ひは、何に限らず其徴候ある時に療治すべけれど、殊に風邪は罹り易く
して、他症に變じ易きものなれば、之に注意することも亦細ならざるべから
ず。

其八 急發の腦病及び腹痛に就ての心得

旅中急に腦充血若くは腦貧血を起し、又は劇烈なる胃痙攣を生じて、殆んど人事を辨ぜざらんとすることあり、かゝる場合は、腰掛茶屋若くは宿屋に向つて、漫りに立騒がぬやう申含め、これは豫ての持病の起りたるなれば、一時の苦しみにて、決して心配すること無しと告げたる上、腦病ならば、氷嚢を命ずるか、單に氷を求めて冷すか、氷も氷嚢も無き時は、盛に冷水を頭に打掛けしむるかすべく、胃痙攣ならば、自分携帯の百草を、湯吞にてドロ／＼に解いて貰ひ、一息に其多量を腹するが好し、此際、茶屋宿屋などにて勸むる藥ありとも、熊膽ならば宜しく、熊膽以外は著るしき効驗無かるべし、なほ、以上にて一時を凌ぎたる後、全く快癒するに至らずば、醫師の治癒を受くるを好しとす。

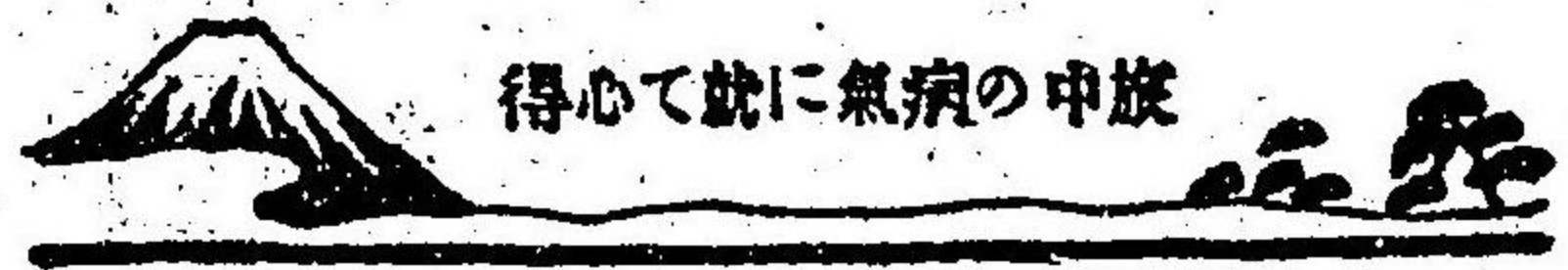
其九 途上にて病起りたる時の心得
人力車、馬車、汽車、船、駄馬等の旅行機關の上、若くは徒歩の最中にて、突然病ひ起りたる時は、用意の藥品を服して一時を凌ぐの外、目を瞑りて固く齒を噛み合はすこと、拇指を中にして固く兩手を握ること、兩手の拇指に力を籠むること、の、三柏子を揃はせ、以て忍耐して、到着すべし所に到着するの時を待つべし、決して苦しみ唸くべからず、又、突然起りたるにあらずして、途上に病ひの徴候あらば、速かに用意の藥劑を服して、之を豫防し、それにてなほ募らんとする傾向あらば、己むを得ざる時の外は、速かに其日の旅行を切り上げて宿に着き、手當の法を講ずべし。

其十 夜中宿屋にて病起りたる時の心得

宿屋に着きて寢床に入りたる後、若くは一寢入したる後に病ひ起りたるは、まことに都合悪きもの也、枕許に置きたる火鉢の鐵瓶にて、用意の藥劑を服し、心氣を鎮め、夜着を頭より被りて、身動させず時を經べし、斯くて、大抵の病ひは朝迄持ちこたへるもの也、又、此大幸抱にて癒つて仕舞ふこともあり、どうしてもやりされぬ時の外は、一宿屋を呼び起して騒がすべからず。

其十一 湯氣にあがりたる時の心得

旅中至極草臥れたる上、若くは空腹なる時、宿屋にて風呂に入るときは、湯氣にあがりて眩暈卒倒することあり、此時人に頼みて面に冷き水を吹きかけしむべし、若し吐血出てて止まざる時は、全身に水を吹きかけしむるを好しとす。



其十二 旅中携帯の藥劑、及び旅中買求むる藥劑に就ての心得

旅中携帯の藥劑器具は

(一) 重那四、○ 硝着四、○ 格末○、三の劑を以て調合したる散藥を、丈低く幅廣くして口の大なる、堅牢の小壺に入れたる

(二) 百草若くは熊の膽の類

(三) 寶丹膏、石炭酸膏等の傷藥

(四) 糊帶、綿撤絲等

(五) 清心丹、ゼム、仁丹等の、半分は慰みに嚙む清涼劑

右の外、其人々に依つて適宜の物あるべきが、先づ、以上だけにて大體間に合ふべし、なほ、旅中買求むる藥劑も、右を標準として之に遠ざからぬやう

にし、珍しき物、變りたる物は、如何に勧めらるゝとも取らぬが好し。

◎旅中の變事に就ての心得

其一

途上若しくは腰掛茶屋、或は宿屋に於て、俄に地震、洪水、海嘯、噴火、落雷、颶風等の天變地異に遭ひたる場合これ等の場合に就ては、それ〴〵心得方あり。先づ何れにも共通する豫備の心得は

(甲) 途上に於ては、斷えず天候變化の狀態と、地形地勢の如何とに注目し、急變ありたる時、如何にして何れの方面に避けんかを研究すべし。

(乙) 腰掛茶屋に於ては、萬一異變生じたる時、此家は何程の異變に對して如何程の對抗力を有するか、破壊し若しくは倒潰する時、如何なる狀態を呈すべきか、其場合災ひを免るゝ方法は如何、身を脱する方面は何れぞ等、注意し置くべし。

(丙) 宿屋に於ては、家の位置、東西南北の方角、表裏の戸口、戸口の外の狀態形勢、戸締りの具合、座敷の位置、家全體の組織と己れが座敷との關係、建築上の缺點の有無、異變あらば、如何にして何れより脱すべきか等を、よく〴〵研究し置くべし。

等にて、更に進んで、實地異變の生じたるに對する各別の心得を擧ぐれば

(一) 地震の時 地震は突然大きく揺るゝこともあれど、大抵は前に小

き觸れ込みの揺れありて、其後にドシンと激しく打着けるものなれば、手早く第一に先づ足袋を穿きて、次に金銭を身に着け、次に頭に物を冠り、それにてなほ餘裕あらば、重要なる物品を隻手に提げらるゝだけ持ちて、上草履を穿きつゝ飛び出すべし、上草履を穿く間無くば足袋跳足にても好し、但し、逃げ口は、前に述べし所に依つて、安全なる活路を選ぶべし。

(二)洪水の時

洪水は地震よりなほ更に徴候明かなるものなれば、豫じめ之を避くるの方法を講ずること容易也、風雨甚だしく、河水汎濫し來らば、河岸及び河に連なりたる平地、又は崩れさうなる崖下に寄りたる家に宿泊すべからず、されど、宿泊したる上にて洪水の

來るに逢はゞ、宿の主の所見と己れの所見とを折衷して、自分のみならず、宿屋の者と泊り客との全體の爲めに、避難の方法を講じ、己れの所持品は、一物を失はずして携へ去るやうにすべし、但し、此場合には、先づ足袋草鞋を穿いて結束した後、宿屋と協議交渉すべし也。

(三)海嘯の時

己れ自覺したる海嘯の徴候ある時は格別、殆んど凡ての場合に於て寢耳に水のものなれば、たゞ何をも扱て置いて、逃れらるゝ限り逃れんことを試むべし、此外に法も術も無し。

(四)噴火の時

平生少しく噴火しつゝある山、若しくは嘗て大に噴火せしことある山が、近頃時々鳴動すと云ふやうなる噂を聞きたる時

は、其附近に宿泊すべからず、されど、途上に於て噴火の激しさに逢はゞ、只管走りて逃るゝか、河岸の巖窟に潜むかの外無かるべく又、宿屋に於て噴火に逢はゞ、足袋を穿きたる上に草鞋或は草履を穿き、頭には成るべく固く大なる物を戴いて走り出づべきのみ。

(五) 落雷の時 雷鳴甚だしき時には、みだりに動き歩くべからず、又、決して大樹の下に立ち寄るべからず、途上にては、宿屋茶屋にても落雷したる時決して驚き慌つべからず、落着いて己れと他との別を判ずべし、落雷の爲めに傷害せられずとも、驚き慌つる爲に思はぬ怪我をすることあり、注意を要す。

(六) 風害の時 大旋風襲來したる時、驚いて立騒ぐは愚也、地に伏す

が最上也 又、颶風は一陣々々間を置いて激しく募り來るものなれば、途上にて之に遭はゞ、堅牢なる宿屋を見定めて、速かに之に投ずべし。

其二 火災に罹りつゝある地を通過する時の心得
 旅中偶然にして、火災に罹りつゝある地を通過することあり、晝火事ならば、裏通りか、畑中か、田中の路を抜くこと、急ぐ時の心得なれど、遊覽的性質を帯びたる旅行には、變に依つて現はるゝ人情風俗の裏面を觀察すべく、態と時を費して、之を見物するも可なるべし、但し、此場合、土地の人と喜憂の關係無き旅人なればとて、所謂對岸の火災視に、たゞ面白がるべからず。开は餘り不人情の態度にて、心ある者の爲すべき事にあらざるのみならず。



らず、土地の者の憤怒を買うて、危害を加へらるゝこと無さを保せざれば也、
 なほ、宿り後れて夜も歩みつゝある時、前面に火災起り、而もそれは己が宿
 借らんとする宿場ならば、速かに馳せ至りて、善悪を問はず先づ取着の宿屋
 に投じ、旅装を解たる上にて、成るべくは宿屋の印ある提灯を持ちて出づべ
 し、左にあらざして、宿屋にも着かず、旅装の儘火事場迄浮かれ行かば、人
 に怪しまれて危害を加へらるゝことあるべく、甚だしきに至つては、火事場
 泥棒とも放火者とも誤認せらるゝこと無しと云ふべからず、若し夜通しの旅
 にも、斯る場合決して裏通り、抜路、畑中田中の路などに依るべからず、
 これ故らに人の疑ひを招き、災ひを買ふもの也、速かに豫定を變更して、取
 着の宿屋若しくは木賃宿かに投ずべし。



其三 宿屋にて火災の起るに遭ひたる時の心得

宿屋にて火災の起るに逢ひたる時は、先づ

(一) 宿屋の貨着を手早く自分の着物に着換へると同時に、金入を確と身
 に着くべし。

(二) 足袋を穿くべし。

(三) 荷物を一纏めにして手に提ぐべし。

(四) 上草履を穿くべし。

の順序を履みたる上、宿屋より出てたる火事ならば、大聲にて他の宿屋に移
 るぞと斷り乍ら立ち出て、同じ土地、或は隣れる土地の安全なる宿屋に至り
 其由を告げて宿りを求むべし、又、近火にて危しと見えたる時は、右の順序

履みたる上

(一) 帳場に至り、如何にして何れへ立退くべきかを指定且つ案内せしめ、之に従ふべし、是宿屋としても當然の任務なれば也。

(二) 若し又、危急の場合にて前述の餘裕無く、勝手に立退かれたしと云はゞ、宿料は如何すべしやと問ふが、此場合の心得也、向うは、危急の場合そんな事どころでなければ、宜しう御座いますと云ふべし、そんなら茶代の印と云ひて幾等か置くを好しとすれど、その間とへ無くば、いづれ後と云ひ棄て、出立つべし。

(三) 立ち出づる時、己れの下駄か靴かと分らば突つ掛くるも好けれど、左なくば上草履の儘に飛び出すべし、草鞋の旅に於ては無論此外に



途無し、又宿屋に依りて板の間の清さを自慢に、態と上草履を置かぬもあれば、此場合は有合ふ履物を突ッ掛くるより外無しと知るべし。

の手續に依り、立ち出て、同じ土地或は隣れる土地の宿屋に投ずべし。

但し、火災の起りたる時既に明け方なるか、若くは明け方に近からば、其儘出發して前途に向ふも好けれど、成るべくは、他の宿屋に投じ朝飯を濟ますべく、夜中若くは宵の口ならば、無論他の宿屋に投ぜざるべからず、爾せずば、覺る無き疑ひを受けて迷惑に及ぶことあるべし。

其四 喧嘩或は果し合ひの傍を通りかゝりたる時の心得
旅中には種々なる事あり、人氣荒き宿場博徒の多き地方などを旅行すれば、

偶然にして、大勢の血塗れ喧嘩、生命のやりとりの果し合ひの傍などを通り掛ることあり、此場合面白さうに見物すれば、眼開みたる者共の爲めに如何なる危害を加へらるゝや測るべからず、崩れたる一方の人数の中に捲き込まれては猶更剣呑也、他より來りたる旅人なりとの特徴を、殊更目に立つやうにして、早々に通り過ぎ、見物したくば、其場を後にしてより離れてすべし、成るべく、俛にて急ぎ過ぐるを好しとす、若し又、闘ひ酣にして大道に血の雨降る様子ならば、それより餘程前にて歩みを停め、遙に見物しながら事の過ぐるを待つべし。

其五 途中にて追劔或は胡麻の灰に逢ひたる時の心得
追劔、胡麻の灰などは、昔の道中の事かと思へば、今も時々其噂を聞く、



兎に角道中は油断のならぬもの也、堂々たる男子ならば滅多の事もあるまじ
さが、老人婦女乃至弱々しき男にては、何所に至るも此憂ひ無しと保すべか
らず。

追剌は名乗り出て、強奪を試むるものなれば、これに對して細かさ心得を
要せず、たゞ膽を据ゑて飽く迄も平氣に、彼にも我にも別段の武器無く、唯
だ膽と膽、力と力を以てのみ争ふべき時にして、我れ能く彼に敵し得べし
と信ずる時は、咄嗟に機先を制して、大喝一聲躍りかゝり、彼をして辟易し
て却走せしむべし、又、ピストルにても短刀にても、彼と我と同じ武器を有
せる時は、これ亦前の例に倣ひ、機先を制して之を突き出すべし、落着いて
事情を察すれば、我より彼が驚き易く恐れ易き地位に在るもの也、主客地を

轉ずること唯だ一呼吸の作用のみ、されど、どうしても叶ひ難しと見たる時は、平然として所持品残らず破れ鞋を棄つる如く投げ出し、彼をして驚ろ其意表外なるに呆然たらしむべし、語を換へて云へば彼を煙に捲くべし、是れ損失を軽くする方法也。

胡麻の灰らしき者に附かれたりと覺らば、速かに警戒して之に遠ざかる良策を講ずべく、若し良策無き時は、却つて逆に出て、此方より親しく話しかけ、放膽的に大言壯語する中、チク／＼餘所事に寄せて彼の急所を突き、彼をして辟易して離れ去るに至らしむべし、此外の拙策は却つて禍ひを招く本也。

其六 宿屋にて泥棒に逢ひたる時の心得



宿屋にて金銭其他所持品を失ひたる時は、直ちに宿の者を呼びて其旨を告げ、嚴重に取調べしむべし、縦令深夜にても決して遠慮して明朝を待つべからず、又、深夜断らずして己れの室に入り来る者あらば、屹と詰問して、其何者なるかを確め、女中若くは雇ひ男ならば、所故に入り來れるかを問ひ、若し其答辯曖昧ならば、直ちに宿の者を呼び起すべし、此際は如何に大聲を擧ぐるも妨げ無し、次第に依らば、警察の手を借るの覺悟あらざるべからず。但し、いさゝかの品ならば、事荒立てざるが好し、荒立て、怒じ手續が面倒になりては、却つて損也、なほ、事荒立てまじと定めたらば、縦令冗談まぢりにても、失せ物あることを口外せざるを好しとす。

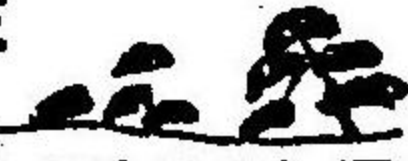
其七

狂人亂暴者に逢ひたる時の心得

道中にて、亂心して人に危害を加ふる者、或は酒に酔ひて亂暴する者に逢はじ、只管ら避けて争はざるべし、萬已むを得ざる時の外は、之を相手に腕立てすべからず、走り避けて警官に報告し、之を取鎮めさすべし、但し、土地に依りて、斯る場合警官が甚だ尊大にして且つ無精に、容易に動かぬことあるものあれば、此時こそ、狂人亂暴者に對して怯なるが如かりしに反し、一番大いに公憤心を發揮し、正々堂々と之を攻撃して可也。

其八 喧嘩を吹き掛けられたる時の心得

道中何かの行き違ひより、喧嘩を吹き掛けらるゝことあり、此場合相手が縦令弱く見えても、決して輕蔑して喧嘩を買ふべからず、土地の者には土地の者が最負すること當然なれば、一人に勝ちても大勢の手込めを免れざるべし。



し、矢張前條と同じく警官の保護を受くるより外無し、警官若し不親切ならば、其時こそ畢生の勇氣を振ひ、他の者を眼中に置かずして、偏に警官に食つてかゝるべき也。

其九 何かと見誤まられて難に逢ひたる時の心得

土地の者共が憎む所の或者と見誤まられ、或は嘗て土地の者に損害若くは痛苦を興へし或者と見誤まられ、思はぬ災難に逢ふことあり、かゝる場合、一言或は一舉にして其相違を證據立つる方法と材料とあらば可なりと雖も、左にあらざれば徒に辯を費して争ふも無益也、直ちに警察に赴きて明かに之を判つべし。

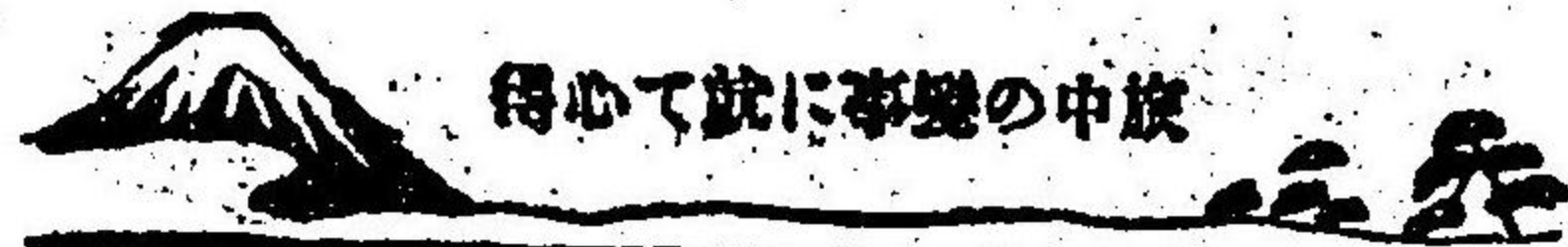
其十 他人の難に罹れるを見たる時の心得

旅中他人の難に罹れるを見ることありとも、よくく明白なる事柄と、己れに縫り着かれて逃れ難き場合との外は、みだりに其中間に挟まるべからず土地の風習、其事情を知らずして、怒じ俠骨がりては、却つて赤耻を搔き、又、迷惑となり、災害を招く等の事あるべし、但し、己れの見たる事を警官に報告するの親切は必ずあるべし。

其十一

野馬、放れ牛等の驅け來れるに逢ひたる時、惡獸、毒蛇、狂犬等に逢ひたる時の心得

田舎路にて、野馬、放れ牛等が真幕地に驅け來れるに逢ひたる時は、何人も先づ吃驚するもの也、此場合路幅廣さか、路傍に田畑か森林かあらば、之を避くるに難からずと雖も、山間の小徑、一方は崖にて一方は川などの所に



てはまことに困るもの也、されど、慌てずして路の傍らに横に立ち、姿勢を正しくして少しく反り身になれば、普通の人の身の厚さは數寸に過ぎざるを以て、牛も馬も其前を駆け通るべし、慌てゝは駄目也、體操の「氣を着け」の姿勢を取りて、横に正しく道路に向ふべし。

又、山中にて狼か豺か山猫かに逢ひたる時は、慌てずして用意の燐寸を摺り、そこらの燃易き物に火を移し、悠々と焚火を始むべし、而して後杉皮等にて速成の炬火を作り、之を振りて大聲に叫びつゝ進むべし、若し燃料無き時は、巻煙草を一度に二三本づゝ吸うて、盛に火を見せ煙を吹きつゝ進むべし、且つ、路傍に大木あらば、スタツキ若くは石にて丁々と打ちつゝ大聲に叫ぶべし、大抵獸を走らしむべし。

蛇は、日本の内地にて飽迄も人に對抗する類を見ず、巨蟒の話は昔の人の
 嘘也、されば、蝮、山かじし、烏蛇等に逢ひたりとも、たゞ氣を附けて不意
 に食ひ着かれぬやうにすれば好し、徒らに形を見て驚き恐るゝは愚也。
 狂犬は最も始末に了へぬもの也、之に對しては、みだりに叱咤し、或はス
 ラツキ、蝙蝠傘の類を振り上げ、或は、恐るゝ後を顧みつゝ歩むべからず、
 大道の真中に蹲まり、身を低くして動かさず、愈々犬の迫りたるを見て、不
 意に飛び上がり大喝すべし、如何なる狂犬猛犬にても、吃驚一番、身を倒さ
 にして歩くこと妙也。

旅行者寶鑑終

旅行者寶鑑

明治四十一年四月七日印刷
 明治四十一年四月十日發行

著作権所有

定價金四拾八錢

著者 伊藤 銀 月

發行者 大橋 新 太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 石川 金 太郎
東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀英 舍
東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館